
リ・ライフ～天獄と14人の自殺者達～

キセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リ・ライフ〜天獄と14人の自殺者達〜

【Nコード】

N1653Y

【作者名】

キセル

【あらすじ】

自殺した者は天国にも地獄にも行けない。

その行き着く先となる天獄という檻に捕われた性別も年齢も様々な14人の自殺者達。

各自自殺者達に己の自殺に仕様した道具が配分された中、彼等14人は強制的な共同生活を強いられる。

共同生活はルールに反しない限り、何をしても自由であり、最後の一人となった者は望みを叶えた上でこの天獄から解放される。

” 生き返り ” を賭けたり・ライフゲームが今始まる。

《共同生活のルール》（前書き）

《小説閲覧前の注意点》

- ・この小説には残酷な表現や性的にキツイ表現があります。
- ・御都合展開はなるべく無いようにしますが出てくるかも知れません。
- ・作者が未熟なのでルールや設定に矛盾や穴が出てくる可能性もあります。
- ・作者が未熟なので誤字、脱字が目立つかもしれませんが適度に脳内補完して下さい。
- ・注意点がまた増えるかもしれません。

以上の事がオッケーという方のみ、読み進めて下さい。

《共同生活のルール》

うけけけっ！はーい、全知全能たる神様から貰った命をわざわざ自分で捨てたクズの皆様注目うッ！！

ようこそ…てんごくへ！！

最初に言っておくけど天国じゃないよ天獄さ。

君達は知ってるかい、自殺した人間ってのは天国にも地獄にも行けないんだよ。

だからここは天国でも地獄でも無い、天獄。

だから僕は天の使いである天使でも地獄の鬼でも無い、天鬼です。うけけけっ！なのでここには天国のような心地好い暮らしも地獄のような苦行も一切存在致しません、良かったね、自殺なんて一番の大罪とも言われてるのに。

まあ言葉を変えればこの空間には何も無いって事だけだね。

君達14人にはそんなこの空間での共同生活を楽しんで貰おうと思います。

君達は既に死んじゃってるので食事は必要ありません、共同生活の時間は無制限です。

一応共同生活でのルールがあるので良く覚えて下さい。

壱・天獄は自殺した者がその記憶を持ったまま辿り着きます、したがって天獄にいる者は全員自殺した事のある者です。

式・その際、自殺に使用した道具と身につけていた物が配布されます、道具の使用方法に関しては各自自由です。

参・この空間に昼や夜、つまり時間の概念はありません、だから共同生活は時間無制限です。

氏・食事は必要ありません、飢えで倒れる事も、もちろん死ぬ事はありませんが睡眠は必要です、睡眠は各自、自分の部屋と独房以外では禁止です。

呉・天鬼ちゃんはナビゲーター兼アイドルなので天鬼ちゃんへの攻撃行為は禁止です。

録・時折天鬼ちゃんマジ天鬼からのプレゼントがあります、どう使うかは自由です。

七・不純異性行為、つまり性行為は両者の合意、レイプのどちらも禁じます、合意の場合はどちらも、レイプの場合は加害者が処罰の対象です、性行為の基準は天鬼ちゃん基準です。

ハ・独房の使用は自由ですが鍵は共通の物として必ず指定の場所に戻して下さい、個人による管理は禁止します。

Q・この空間を調べる事は自由ですが決められた立入禁止の場所に入るのは禁止です。

獣・共同生活の中で殺された場合、それは成仏扱いとなります。

銃市・全員成仏し、最後の一人となった者は願い事を一つ叶えた上で生き返る事が出来ます。

12・共同生活をする上でルールは絶対でありマス。

十三・上記のルールにある禁止部分を犯した人には成仏して貰います、ですが禁止部分に触れなければ何をしてでも自由です。

じゅうよん・《

》

うけけっ!! ではなく、ルールをしっかりと守って楽しい共生
活を送りましょう!!

《共同生活のルール》（後書き）

と、いう訳で始まりました、リ・ライフ／＼天獄と14人の自殺者達、作者のキセルです。

ヴァイスさん、タイトル名の提供ありがとうございます！！

自分はシークレットゲームというゼロサムゲーム物の二次創作をメインで書いてましたが書いてるうちにオリジナルのゼロサムゲーム物を一本作ってみたくなったので本小説をスタートさせました。始まりから終わりまでの大まかな流れは決まっていますので最後まで付き合って貰えたら嬉しいです。

また、シークレットゲームの小説の方も同時にちよくちよく更新して行きたいのでそちらの方もご贖肩して貰えたら嬉しいです。

プロローグ 《終わり、始まる》

たいした理由は無かった。

別段、人生に疲れたとか恋人が死んでその後を追う為とかそんな理由は無。

仕事も決して順調とは言えたものでは無いにしろ、職場の人間関係も悪くなかった。

もちろん結婚なんてものもしてないし両親の手からは既に離れているので俗に言う家庭の事情ってやつでも無い。

それでも：俺、遼はるか 彼方かなたは気が付けばナイフで手首をかつ斬っていた。

ああ、ちなみにこの苗字と名前はコンプレックスと言えたが親父が遼はるか 大地だいち、妹が遼はるか 海恵うみえというふざけた家系のもの（母親は遼はるか 春香はるかというある意味でもっとも残念）なので別段気にはしていない。

だから俺にはわからなかった。

自分が何故、自殺したのか、その明確な理由が。

何か…、何かあったはずだ。

答えを出そうと頭を使おうとするがどうにも働かない。

当然だ、今も俺の手首からはドクドクと血が流れている。

動脈…イツたかな？

痛みに叫ぶ事になるだろうと思って事前にテレビをつけておいたがそこまで必要では無かった。

今もニュース番組で連続猟奇殺人犯が自殺したニュースをやっているがその中身は俺の耳には通っていない。

痛みはそれ程でも無かったがどうしようも無い虚無感に襲われていた、

出血多量により血が足りないのだろう。

視界がぼやけていく…。

ああ、もう良いや、考えるのは。

流れに身を任せようと目を閉じる。

切った瞬間は激しく鼓動していた心臓も穏やかで静かなものになっていた

トクンツ…トクンツ

トク…ンツ。

ドクン…ドクンッ

どれだけ時間がたっただろうか？

心臓の鼓動が止まらない事に俺は違和感を覚えた。

それどころかさきほどまでぼんやりとしていた頭が今は覚醒している。

こうやって思考する事が出来るのが何よりの証拠だ。

これは明らかな異常だ。

目を開けるのが怖かったが今のこの状況を知る為にはまず、それが
必要だ。

ゆっくりと目を開ける、まぶたはすんなりと上へと上がり。

「ッ！！」

俺は驚愕した。

そこが”今まで自分が見た事の無い場所”だったからだ。

見慣れたボロアパートの自室から一変、目に映るのは身に覚えの無い部屋。

「どこだ…ここは？」

当然の疑問だがそれに対する答えが出るはずが無い。

目覚めた俺の身体はベッドの上に寝かされている形だった。

決して高級品とは言えない代物ではあるが自室であるボロアパートの煎餅布団よりは寝心地が良い。

俺はとりあえず起き上がるとベッドに腰をかけて部屋を見渡す。

とくに注目すべき家具も置かれていない殺風景な洋風の部屋。

どこかの殺人事件が起こりそうな洋館の一部屋という印象だった。

あるのはベッドと机、それと最早映る事の無いアナログテレビ。

ドアがあるので出られる事は出られるだろうが…、とりあえずは状況の整理が先決だ。

「病院…な訳無いよな」

俺の自殺…厳密には俺は今生きてるから自殺未遂になるが、に気付

いた誰かが救急車を呼んで俺を病院まで運んだ。

そんな事はこの現状を見れば推理するまでも無く、間違いだとわかる。

「……………」

俺の右手。

そのリストカットした部分を意図的に見ないようにしながら手を握ったり開いたりしてみる。

ぐっ、ぱっと何事も無く正常に動く、…いや、動いてしまった。

恐る恐るその箇所を薄目で、目を配らせてみる。

「嘘…だろ？」

傷が消えていた。

あれ程流れていた多量の血も消え去り、普段の、代わり映えの無い自分の腕が見える。

「…なんだってんだ」

状況が掴めずに落胆する。

ふとポケットに何か入っている事に気付き、すぐにそれが何かかわかった。

「…タバコか」

箱に入ったタバコと100円ライター、タバコは七本入っていた。

そういや…持ったままだったか。

そのうちの一本を抜き取り、口にくわえるとライターで火をつけ、一服をする。

タバコの本数を考えると少し勿体ないかと思ったが何より一度、気持ちを落ち着かせたかった。

「ふうっ…」

肺に入れた煙を吹き出す。

暇つぶしにアナログテレビをつけようかと思ったがリモコンも本体の電源スイッチも見当たらない。

落ち着いて今の状況を整理してみよう。

俺は自殺の為に右手首をナイフでかつ切った。

それは間違いないが…、その傷はすでに存在せず、俺の身体はどこかもわからぬ場所に移されていた。

ここが病院で無い事は明らかだが、拉致されて来た…と説明する決定的なものも無い。

自殺者を一つの島に送る。

以前、そんな漫画を見たことがあったのでその可能性が脳裏を過ぎる。

：アホくさい、と頭を振って、フィクションと現実を混同しないようにした。

「現実…か」

言葉に出して改めて考える。

ここはもしかしたら…死後、天国とか地獄とか、そんなレベルの場所なのではないか？

当たり前だが死んだ後の世界を見た者等居ない。

小説や漫画によく書かれている死後の世界だってしょせん、イメージや空想で作られたものだ。

「ただ…」

ここが死後の世界ならば…間違い無く地獄だ。

俺が天国に行けるはずが無い。

「やっぱ…部屋から出るしかないか」

タバコを床でもみ消し、重い腰を上げてようやく立ち上がる。

…そういえば、机はまだ調べてなかったな。

「…なっ!!」

視線を机に向け、俺の身体はまた硬直した。

机の上に置かれたそれを手に取り、まじまじと見つめる。

「何で…こんな物が」

ギリリとした刃に俺の顔が写る。

思い出すのは先程の自分の姿。

ナイフで自分の右手首を切るその姿。

そして…今俺が握りしめているそれはナイフ。

俺が自殺に使った物よりも刃渡りが長く、鋭い。

形こそ違うが、ナイフで自殺し、気付いた場所に置かれていた物もナイフ。

ゾクゾクと妙な寒気がした。

—ブウンツ

「!?!」

その時、ずっと沈黙していた背後のアナログテレビのスイッチが入った。

「…おいおい」

テレビ画面に映ったのは…”見た事の無い生物”だった。

天使のような翼に悪魔のような身体。

悪魔のような角に天使のような輪っか。

「…はあ？」

天使とも悪魔とも見えるその生物を見た瞬間、俺は冷めた。

謎生物のどこぞのバラエティ番組の企画のマスコットキャラのようなその出で立ちにだ。

『うけけけっ！』

画面の中の謎生物は男とも女とも取れないような甲高い声を上げる。

『ようこそ、命を捨てた皆様、皆様は一度、自分でその命を捨てました、つまりこれって命がいらなんて事ですよねえ』

画面の中の謎生物は一方的にこちらに向けて言葉をかけてくる。

謎生物の言う、自分で命を捨てた、という言葉は間違いなく自殺した事を示している。

『うけけけっ！！なので今君達に与えられた命をどう使おうが僕の勝手です』

「こいつ…何勝手に」命を…使う？

こいつは何を言っている？

『これより説明会を開催します、皆様は大広間へとお集まり下さい』

「…説明があるのか？」

今のこの状況に対しての説明ならば俺としても断る理由はない。

…が、ノリがいよいよどこぞのバラエティー番組じみている。

『説明会の前にルールを一つ与えます、良いですかあ？聞き漏らさないで下さいよ、一度しか言わないですよお？』

画面の中の謎生物が勿体振るようにクルクルと回りだす。

状況が掴めない俺はただイライラとした。

『十三・上記のルールにある禁止部分を犯した人には成仏して貰います、ですが禁止部分に触れなければ何をしても自由です』

「…は？」

『うけけけけっ！それでは！説明会でまた会おうね！！』

「なっ！ちょっと待てよ！！」

ブツンッ：

俺の言葉に耳を貸すつもりも無いのか、アナログテレビは役目を終えたように電源を切り落とし、再び動かなくなった。

「上記のルールって：肝心のルールが全然わかんねえんだけど」

一方的に話し掛けられ、会話を終えられたので置いてけぼりにされた感がある。

それに出て来た単語がいくつか引っ掛かる。

ルール、禁止部分、成仏。

そして何をして良いという言葉。

「：十三？」

謎生物は確かにそう言っていた。

つまりこれは13番目のルールと言う事を考えられる。

そしてこちらに向けて呼び掛ける時に発した”皆様”という呼び方。

ルールを一人に一つずつ与え、俺は13番目、と考えればしっくりと来る。

「他にも：誰か居るのか？」

自分以外にも誰かが居るという安心感に多少心が落ち着く。

だがそれは同時に得体の知れない誰かが居るという恐怖も生まれる。

「…くそ」

気持ちを落ち着かせようと再びタバコを抜き取り、口に加え。

「……………」

…止めた。

この先、どれだけ長い間に居るかわからない。

別段、ヘビースモーカーという訳では無いがちよつとは温存しておいた方が良さだろう。

「…行くか」

ナイフは一応、持っていた方が良さだろうと思い、服に隠しておく。

ドアに手をかけて、そういえばと手を止めた。

「鍵…無いんだな」

特に置いておく物も無いので今はそれで良いが…。

考えないようにしても”これから”について考えてしまう。

——言いようの無い不安が俺を包み込んでいた。

プロローグ 《幼なじみ》

ボタンッ

部屋を出るとそこには薄暗い通路が広がっていた。

改めて自分の居た部屋のドアを見るとご丁寧にも『No. 13 《遼
彼方》』とネームプレートがかけられている。

「…マジか」

まるで招待されたかのような状況に疑問は部屋に居た時よりも更に
広がる。

パツと見て自分以外の人間が居るようには見えないが…それは単に
通路が薄暗く、奥の方が見えないからだろう。

キュルキュルキュル…。

「…何だ？」

だが…変わりに聞こえてくる車輪を回す音。

バイクや車の類では無い事はゆっくりとした車輪が回る音でわかる。

…だとしたらこの音の正体は何だ？

音の正体を確かめる為に、ゆっくりとその先へ向かう。

慎重に…、服に隠したナイフをいつでも取り出せるようにしながら暗がりの中を進み。

そしてその正体を見た。

「——ッ!!」

俺はその”正体”を見た瞬間数秒間固まり。

…ここが《天国》だと確信した。

車椅子に座り込んだその”正体”は。

「詩織…、柏瀬かしわせ 詩織しおり?」

「…ひゃうっ?」

相手は声をかけられた事が…、いや、名前を呼ばれた事がよっぽど意外だったのだろう間拔けな声を上げた。

「詩織! やっぱり詩織なのか!!」

俺は詩織に近付くとその存在を確かめるように身体を掴む。

柏瀬 詩織は…俺の幼なじみだ。

本来ならば…二度と会うはずの無い幼なじみ、なぜなら。

「昔のまんまだ…何で? どうなってる!?!」

彼女は…本来なら三年前に”既に他界している”。

その彼女が…”他界した時のままの身体”でそこにいるのだ

なので今、目の前にいる詩織の存在が信じられず、その身体にベタベタと触る。

キュルルッ

「おわっと!!」

だがそれは詩織が突然車椅子を後ろに引いて後退させた事でストッブさせられた。

「かなちゃ、…彼方？」

遠い昔の呼び方をしようとした詩織は言葉を一度詰まらせ、俺を名前で呼ぶ。

「…わかるのか？」

「何となく…面影は残ってたから、何でここに？」

「それはこっちの台詞…、いや」

詩織がここに居る事で一つ、確信出来た事。

ここが死後の世界だというのは確実だった。

その事を詩織にも伝えようとした時。

ガチャッ

詩織の背後で扉が開いた。

「…誰？」

現れたのは…今度は知らない女だった。

見た目的な年齢は詩織と対して変わらないであろう、女子高生くらいの少女。

「あっ…未娘さん」

詩織は面識があるらしく、その女性の名前を呼ぶ。

「…あんたは？」

知らない人物の登場に俺は少なからず、警戒をした。

「人に名前を尋ねる時はまず自分からじゃない？ 遼 彼方さん」

「なんで俺の名前を…、詩織から聞いたのか？」

視線を詩織に見せるが彼女は黙って首を横に振った。

「変に警戒心を持たれるのは心外ね、私はただネームプレートを見ただけよ」

女は腕を組んで冷静な口調でそう答えてくれる。

「なるほどな…、んで、改めて聞くがお前は？」

扉に掲げられたネームプレートにはそれぞれ、確かに名前がついている。

なので”とりあえず”は女の言う事を信じる事にした。

「織笠^{おりかさ} 未娘^{みこ}…」

少女は静かな口調で自分の名前を告げる。

「それで…二人は知り合いみたいだけど、ここがどこだか知ってる？」

織笠の言葉を聞くと彼女も境遇は俺達と変わらないのだろう。

「さあ…？俺も今、気付いたらこの場所に居た」

「そう…、二人は兄妹…という訳には似てないし」

「だ…誰がこんな奴ときょうだ——」

「単なる幼なじみだよ」

織笠は俺と詩織の関係が気になるのか、口を挟もうとする詩織より先に俺はそう告げる。

「幼なじみ…？随分と歳が違うけど」

そりゃそうだ、詩織は女子高生、対する俺は二十歳になる。

いや…詩織が生きていれば俺と同じ歳なんだろうが。

「ちょっと待てよ、そっちはっか質問してるが俺からの質問も答えて貰うぞ」

俺はこの状況を整理する為の最大の問いをこの女にしてみる事にした。

「…どうぞ」

「…ここに来る前、最後の記憶を覚えているか？」

…俺と詩織には共通点がある。

それは幼なじみという単なる括りでは無く、もっと具体的な物で、だ。

「……………」

「もしかして…けどな、お前は…」

だんまりを決め込む織笠に俺はその答えを先に言おうとした。

「…自殺したら、気付いたらここに居た」

「ッ…」

…やはり、同じだ。

俺は当然として…だが、詩織の死も自殺だったのだから。

「…それじゃあ、あなた達も？」

「ああ、俺も詩織もじさ——」

ドゴッ

「ぶべっ!!」

言いかけた俺の身体めがけて詩織が車椅子事猛スピードで突っ込んできた。

「痛…、何しやがる!!」

こんな状況でもしっかりと機能している痛覚に恨みながら俺は詩織を睨み付けた。

「……………」

だが俺の怒りは一瞬で片隅の方へと追いやられる。

「…死ね」

詩織は目に涙を溜め、呪いを込めた目で俺を睨みつけていた。

…そうだ。

目の前の車椅子の少女が俺を憎んでいないはずがない。

なんせ今日の前に居る男は幼なじみ…兼。

自殺の原因を作った張本人なのだから。

「…すまん」

謝ってどうにかなるものでも無く、それでも出来る事と言えば頭を下げ、そう呟く事くらいだった。

「…何について？」

「何につて…そりゃ」

…決まっているだろ。

俺は言葉を続けようとするが…。

「…いい加減に本題に戻って良い？」

痺れを切らしたのか、織笠がその場の空気を最初のものに戻した。

「…あ、ああ」

心の中で感謝しつつ、俺は”本題”について考える。

ここでの本題というのは当然、俺達三人の共通点だ。

「さっき言いかけてたけど、あなた達二人も自殺した…という事で間違い無いのね？」

「ああ…間違い無い」

背後で睨む詩織の気配に冷や汗をかきつつ、俺は答える。

「一緒に所を見ると…二人は心中でもしたの？」

「だ…誰がこいつとなんか」

「詩織は三年前だ、葬式には俺も行ってる」

「ふーん…そんな時”だけ”は来たんだ」

棘のある言い方だが俺に反論の権利は無い。

「それが本当なら…私達の共通点は死…、それも自殺って事か」

「…ここが死後の世界だとしても、三年前に死んだ詩織と今の俺がこうして存在しているのがわからんな」

「…もしかしたらここには本当に時間の概念が無いのかもね」

「時間の概念が無い？時間が流れて無いって事か？」

「…携帯は見た？」

言われてハッと気付く。

あまりにも突然にこの状況におかれたせい、真っ先に確認すべき事を忘れていた。

「…まず状況を知るのがこういう場合の鉄則だと思うけど」

呆れたような織笠の声だが反論も出来ない、曖昧な返答と共に携帯を見た。

アンテナのマーク当然立っておらず、圏外だったがそれよりも気になったのは日付と時間だった。

《16／38【冥】》

《0…123》

「…は？」

有り得ない日付と曜日、そして時間。

これが本当なら今日は16月38日の冥曜日、0時123分という無茶苦茶な時間だ。

「私の携帯も時計も似たような感じ、この意味がわかる？」

「ええ…」

織笠の問いに詩織は神妙にコクリと頷いた。

「このままじゃお正月が来ないですね」

「……………」

大まじめな詩織の問いに織笠は俺達に会ってから初めて目を丸くしていた。

冷静な雰囲気、織笠から初めて一本を取った気分だ、…詩織がただ。

「彼方…ちよつと」

チヨイチヨイと手招きされたので仕方なく織笠に寄る。

どうでもいいが呼び捨てかよ。

「彼女って…」

「ああ…えつと、ちよつと残念な奴だな」

一見クールに見えて実は天然なのが詩織だった。

全く関係無いが小学生の遠足の説明会の時、あんまんはおやつに入りますか？とビツと綺麗に手を上げて質問した詩織の姿を思い出す。

「詩織さん…つまりね、三年前に死んだあなたとその三年を生きた彼方が一瞬に居る、どちらも死んでからここに来たとしたらここには時間、そのものが存在しない、意味の無いものという訳」

少し戸惑いながらも織笠は詩織に状況を説明した。

「なるほど…」

「わかった…？」

詩織がウンウンと頷くと織笠も安心したようにホッと息をつく。

「つまりここでは誕生日が来ないから歳を取らない…って事ね」

「……………」

難しい顔をして片手で顔をおおう織笠。

「詩織」

なのでここは助け船を出してやろうと考えた。

「つまりだ、あんまんを買ってから三年後にもう一度あんまんを買ったけど二つの中身はあんまんだったという事だ」

「…なるほど」

「…それで言いの？」

半ば呆れた声の織笠に良いんだよと伝えるように俺は頷く。

「これで三人…か」

それで納得したのか織笠は長く続く廊下の先を見た。

「私達に振り分けられたナンバーだけどね、詩織さんの14番で最後だった」

「つまり俺達は全部で14人…かな、普通に考えれば」

部屋のネームプレートにはNo. 13と印されていたし、俺はかなり後ろの方だったようだ。

「ちなみに織笠は？」

「私？私は9番だったけど？」

「9番…？」

部屋の順は番号の順だ。

なので9番目の織笠が14番目の詩織に最初に出会った事が気になった。

「私の他にも何人が居る事はわかってたから、最初に全部で何人居るのか確認しただけよ」

「…なるほど」

しかし織笠のこの冷静さ、そして行動の速さ。

どこか不自然なものを感じながらも今その答えが出て来るはずは無い。

「とりあえず…なんだが、説明会…ってのに行かないとな」

そこで今の俺達のおかれたこの状況の答えが出れば良いが…。

「賛成…、あつ、だけど他の人は？」

「これだけ通路で話してて誰も出て来ないし、みんなもう大広間に集まったかもね」

詩織の疑問に織笠が答え、詩織もそれに納得したのかなるほどと頷いた。

「それに大広間に行けばどのみち全員が来るだろう、んじゃ…行くか」

俺はそう言って詩織の車椅子を運転しようかと思い、取っ手に手を置いた。

キュルルッ

「おわっ!!」

だがそれを拒むように詩織は車輪を回して俺から距離を取るよう前へと進み。

バシンッ

「あうっ…」

壁にぶつかった。

「い、良い、一人で行けるから」

顔を赤くさせながらも、それでも詩織は気丈にそう答える。

「…そうかよ」

俺はやれやれといった具合に詩織の後へと続いた。

「……………」

背後では織笠が詩織の車椅子をじっと見つめていた。

プロローグ 《大広間》

薄暗く続く廊下を俺と織笠が歩き、詩織が車椅子の車輪を転がしていく。

大広間と書かれた部屋を見つけるのにそう時間はかからなかった。

中に入ると廊下の薄暗さとは一転して大広間は明るく、暗さに慣れた目を刺激される。

大広間と呼べるほどの大きさでは無いにしろ、丸い机とそれをぐるりと囲む椅子。

既に8人の男女が椅子に座っており、部屋に入って来た俺達を一斉に見た。

織笠は冷静に詩織は状況に戸惑い、俺は軽く手を振っての入場。

何人かは手を振り返してくれたが大半は無反応だった。

…これで11人か。

俺と詩織、そして織笠の境遇を考えればここに居る皆も立場は同じなのだろうか？

「…一つ、警告しとく」

「…ん？」

横に居た織笠がぼつりと俺達二人にだけ聞こえるように呟いた。

「ここから先：不用意な発言や行動は控えなさい」

織笠はそれだけ告げるとさっさと前に出て俺達と距離をとった。

「……………」

織笠の言いたい事は俺にもよくわかっていた。

この異常な建物に集められた14人。

これから何が始まるかはわからないが良い予感ではなかった。

「…そうね、自己紹介に失敗したら痛い娘になっちゃうし」

俺の隣に居る一見クールな天然幼なじみは多分、わかってないだろうが。

俺と詩織も空いている適当な椅子に向かう。

車椅子の詩織の為に椅子を退かし、スペースを作ってやった。

「さて、これで11人目ね、あなた達、名前は？」

新たに大広間を訪れた俺達三人に向け、一人の女が立ち上がり、声をかけてきた。

歳は…大学生くらいだろうか？

「私？ 柏瀬 詩織」

「織笠 未娘…」

女性陣二人が先に自分の名前を告げる。

「私は宇佐^{うさ} 飯子^{いひこ}よ、よろしく」

宇佐は二人に軽く手を差し出して握手を求める、二人がそれに答えると今度はぐると俺の方を見た。

「それで、あなたは？」

「………」

友好的な宇佐には悪いが俺は名前が名前だけにあまりギャグ染みているのでイマイチ、こういう場で言うのに戸惑う。

「ちょっと！ 聞いているの？」

だがそんな俺の心中なんぞ察せずに宇佐は俺に顔を近付かせて来た。

「…聞いているよ、んな大声あげなくても」

「彼方、早く遼 彼方って名乗らないと皆彼方をどう呼べばいいかわからないんじゃない？」

「いや、もう名乗る必要無くなったわ」

親切心でそう言った幼なじみに感謝という名の舌打ちをして俺は答えた。

「遼…彼方？」

宇佐を見ると明らかに笑いをこらえるように頬を引き攣らせていた。

「人の名前とか笑うのは失礼だと思うが…」

「そ、そうね…、ごめんなさいね、遼 彼方さん」

「ちょっと、フルネームとか止めてくんないか」

「なんか語呂がいいから…、それじゃあ皆、改めてもう一度自己紹介でもしましょうか？」

宇佐が周りをぐるっと見渡しながらそう声に出した。

「おいおい宇佐さんよ、これで何度目の自己紹介だよ？ いい加減だるくなるわ」

椅子に寄り掛かって両手を頭の後ろに置いていた男がうんざりとした声を出した。

金髪のガラの悪そうな男だ。

「大事な事よ、これをしてないと誰が誰だかもわからないでしょ」

そんな男の態度が気に食わないのだろう、宇佐も目を鋭くさせていた。

「だから全員揃ってからやれつつったんだよ、俺は」

男は面倒臭さそうにため息をつく。と男達の方に向けて片手を上げた。

「赤松^{あかまつ} 慶二^{けいじ}だ、まっ…仲良くやっていこうや」

赤松は含みのある笑みを浮かべると軽く挨拶を済ます。

「んじゃ、次」

そしてそのまま自分の隣に居るガタイの良い男の肩にバトンタッチするように手を置いた。

「誹泉^{ひいずみ} 紳一^{しんいち}だ…」

誹泉は名前だけ淡々と告げると腕を組んで目を閉じた。

恐らくかなり鍛えてある身体も合わさって威圧感がある。

その誹泉の横、まるで誹泉を壁にして赤松と距離を取るようになっている男…いや女？中性的な顔立ちだしどっちだろうか？

「えっと…僕かな？^{ふかみ} 深見^{まかい} 柎^ふだよ、よろしく、あの…男です」

ぺこりと頭を下げる深見と名乗る男は俺の言いたい事がわかってるのかそう付け加えた。

中性的な美青年の顔立ちの女と言われても納得してしまいそうである。

「よろしく、彼方さん」

「ああ、よろしく…」

深見は友好的に俺に握手を求めて来たので俺もそれに応えた。

「……？」

不可解なのは深見が俺の手を離そうとせずに俺の目をじっと見つめていた事だった。

「おい…手」

「あっ…うん、ごめん」

深見は慌てて俺から距離を取るように離れると両手を振った。

…顔を赤くさせているが、うん、気にしない事にしよう。

「あはは…、えっと…じゃあ次は」

深見はキョロキョロとメンバーを見渡すと。

「じゃあ私が…」

一人のサラリーマン風の男が立ち上がり、ぺこりと頭を下げた。

「榊 昌弘さかき まさひろです、いやあ…皆様若い方が多くて少し気恥ずかしいですな」

榊さんが言う通り、40代半ばであろう彼の年齢は俺達の中で群を抜いている。

しかしこれで俺達の年齢は本当にバラバラだというのがわかった。

しかし…どうにも幸薄そうな顔をしているな。

「はは…名刺でもあれば良いんですが、先日リストラされちゃいます」

いや、本当に幸薄なんだこの人…。

「次は僕なんだけど…その前にちょっと一言良い？」

次に自己紹介を始めたのはメガネをかけた太った男だった。

見た目で人を判断すべきでは無いが見た目で判断するなら典型的なおタクに見える。

「…なんだ？」

「その車椅子に乗ってるお嬢さん」

「え？…私？」

詩織が自分を指差すと見た目オタクはコクコクと頷いた。

「車椅子キャラ来たッ！これで勝つる！！」

見た目オタク…、いやもういいや、核心した、見た目と変わらず中身もオタクだこいつ。

「…えっと、この車椅子には兵器とか仕掛けて無いけど」

「詩織もこれ以上話をややこしくしないでくれ…、んで、あんたは？」

おおまえだ　ともぎよ
「大前田　友清だよ、よろしく、遼殿」

「あ、ああ…よろしく」

…あまり深く突っ込まないようにしよう。

これで大広間に居る男性陣の自己紹介は終わったが気になったのは男性陣が固まっている事だった。

いや…、別に合コンしてるって訳じゃないから別に良いんだが…、それにしてもあからさまに男性陣が一人の女性から距離を置いている。

「なあ、あんたはなんで一人だけ離れてるんだよ？」

俺はその離れている一人の女性に近付き。

「こ、来ないで下さい！！」

「…はい？」

思いくそ拒絶された。

「彼方、あなた一体その人に何をしたの!!」

「何もしてなかっただろうが! 今まで見てて!!」

横から来る詩織の怒声を正論で返してやる。

「あっ…すいません、その…、いきなり大声なんて出したりして」

「いや…いいけどさ」

謝る女性に一步近付く。

ガタッ

女性は椅子事俺から離れる。

「……………」

一步近付く。

ガタッ

女性は椅子事俺から離れる。

「大丈夫…大丈夫…大丈夫」

女性はそう言いながらも顔を引き攣らせていた。

「彼女は…ちょっと男性恐怖症っていうのかな？それなの」

その様子を見ていた宇佐がそう説明してくれた。

「ご、ごめんなさい!!」

「いや…まあ、いいけどさ」

多少は傷ついてはいたけど大きく謝る女性になんともない風に応えた。

…なるほど、男性陣が固まってた訳がわかったわ。

「わかった、俺はこっから動かないから、そんな怯えないでくれ」

女性から距離を取って話しかけると女性はコクコクと首を縦に振ってくれた。

「さっきも自己紹介したけど俺は遼 彼方、こっちは柏瀬 詩織、もう一人は織笠 未娘だ、あんたの名は？」

さっきから興味なさそうに場を眺めている織笠の事も紹介しつつ、俺は再び声をかけた。

「は、はい…、水茂です、水茂^{みなも} めぐみ」

「そっか、これからよろしくな、水茂さん」

「勘弁して下さい!!」

「……………」

こうまで拒絶されるとは…、やばい、ちょっと泣きそう。

「気にしないで良いと思うよ、僕らもあんな感じだったし」

大前田がフォローを入れてくれた。

「いやあ、男性恐怖症キャラのテンプレはやはり怯えられるですな」

いや…フォローじゃ無かったか。

あゝ…うん、でもそういうやアニメとかでも最近そんなキャラが増えたよな。

「あとは殴ったり暴力振るったりして来るとかか？」

ついニヤリと笑って返してやり、言ってからしまったと口をあけた。

「…ほほう、遼殿もなかなか通と見た」

キラリとメガネを光らせて大前田がかっこつける。

「い、いや、違…」

オタク…と言える程知識豊富では無いが、まあかじった程度には知識があったり。

「なんだよ、大前田の同類かよ…」

「だから違うって…」

赤松が呆れたように茶化して来るのを俺は面倒臭さそうに返す。

別にアニメや漫画といったオタク文化だけで無く、バイクや車、政治からギャンブルの話しだって出来る。

まがりなりにも社会に出て生活した身として、それは必要な事だった。

話題を身につければ会話から置いていかれる事は無い。

会話から置いていかねければ…グループから外れる事も無い。

だからこそ話題性のあるアニメや漫画、音楽にドラマや映画も見て。

ゲームやってギャンブルもやって先輩や友達のススめでスノーボーやゴルフといったいろんなスポーツもやって。

「…それが嫌だったのかもな」
楽しかったかと聞かれればどれも楽しかったが…結局は中途半端のまま、知識を仕入れ、皆の話しに適当に話を合わせて…。

そんな生活だった。

「…それが嫌だったのかもな」

だから…自殺した、のか？

いや…そんな事、少なからず誰もがやっている事だと思う。

「…彼方がオタクになった」

「だから違うって…その虫を見るような目は止めろ!!」

幼なじみからの視線がキツイ…。

いや、詩織からすれば久しぶり？に会った成長した幼なじみがオタクになってたって事だし、そりゃキツイ目にもなるか。

「幼なじみ萌え…とか叫ぶ人になるなんて」

「叫ばん叫ばん」

「…叫ばないの？」

いや、そんな素で返されてもこっちが困るんだが…。

「つーかなんだ？叫んで欲しいのか？」

「そ、そんな訳無いでしょ！馬鹿ッ!!」

…何で怒るよ。

「ほほう…、では遼殿はあくまでもオタクでは無いと？」

大前田が口元に笑みを浮かべながら近付いてくる。

「では…彼女を見てもまだそんな事が言えますかな？」

そして自信満々といった具合にまだ自己紹介の終えていない最後の一人を紹介した。

椅子にチョコンと座り込んだ少女…、俺達の中でも一際年齢が若い。というか幼い少女。

この部屋に入って最初にその少女に目があったのは別に俺がロリコンとかそんなんじゃないかって少女の異質のせいだった。

ここに居る者は俺を含め全員私服なのだが…。

その少女は…巫女服だった。

巫女服といっても見た印象で感じた事で普通の神社の巫女さんが着ている正規？の物とは違うっぽい。

「……………」

「彼方…、鼻の下伸びてる」

「あ…いや、違う、そんなんじゃないって」

必死に否定しつつ、巫女服少女に近付いてみる

「こ、こんにちは…」

少女は怯えながらもぺこりと頭を下げてくれた。

「こんにちは、名前は？」

「えっと…そのー」

名前を聞くと少女は恥ずかしそうに苦笑いを浮かべる。

その反応を俺はどこかで見たような気がして、それはすぐに思い浮かんだ。

…俺が名前を言う時と似てる。

「さっきも言ったが俺は遼 彼方なんつーふざけた名前なんだ、お前は？」

「その…、ひむかい…ひなた、です」

「ひむかい…ひなた？」

なんだ…普通じゃないか、何がそんなに言いづらかったんだ？

「はい、日に向かうと書いて日向、^{ひむかい}日に向かうと書いて日向、^{ひなた}それで日向 日向です」

「…あっ、なるほどね」

日向 日向、うん、うちのおかんと良い勝負だわ。

「っかし…こんな子供が居るなんてな」

そういえば…ここに居る全員のどれだけが今のこの状況を理解しているのか…。

俺の場合はたまたま詩織の事を知っていたのが大きかったが。

「いえ…その、日向ちゃん、一人で来た訳じゃなくて」

俺の言葉に宇佐が言いづらそうに話しかけて来た。

「私、お母さんと一緒にここに来たんです」

「母親…？どこに居るんだ？」

宇佐も水茂も大学生くらいだし織笠は高校生、どう考えても年齢が合わない。

「し、詩織…まさかお前」

「ふふ…ようやく気付いたようね」

詩織はわざとらしく笑みを作って見せると。

「あなたの子よ」

「な、なんだってー」

冗談のつもりで言ったのに俺も無理矢理参戦させられてしまった…。

「ちなみに私は母親じゃないから」

「おい、人を巻き込んで自分だけ逃げるな」

いや、俺が最初詩織をからかおうって思ったのが発端だけど。

「彼女の母親はね、部屋に閉じこもったまま出てこないんだ」

幸薄そうなサラリーマン（元）、榊さんが心配したようにそう言った。

「出て来ないって…何してんだよ？こんな子供を一人にして」

普通この訳わかんねー状況で子供を一人にする親が居るのだろうか？

「あ、あの、うちのお母さんがすいません！！」

俺のハテナマークに答えるように慌てて頭を下げる日向。

「じつはね、さっきあなた達が来る前にちょうど、その事について話してたの」

宇佐が深刻そうなため息をついて机に手を置いた。

「あなた達も説明会を受ける為にここに来たのよね？」

宇佐の問いに頷いてみせる。

「僕らもそうなんだけどね、なんか始まる気配が全然無いんだよ、誹泉さんなんてもう1時間くらいは待ってるんじゃないかな？」

「…別に、たまたま一番に來ただけというせいもあるがな」

深見が見ると誹泉は淡々とした口調でそう告げた。

「やっぱ全員揃わねーとダメってか、ったく…もたもたしてんじやねーっつーの」

赤松は面倒臭さそうに悪態をついて不満をあらわにした。

「だから…ね、私達で來ない人達を迎えに行こうって話しをしてたの」

「なるほどね…」

今大広間に居るのは全員で11人。

つまり後三人來ていないって事になるのか。

「日向の母親の他に後二人か…、さすがにちよつと遅いな」

俺と詩織と織笠の三人は通路で話していた分出遅れたが、それよりも遅いという事はまだ氣がついてないって可能性もある。

「良いと思うぜ、このまま待っててもいつ來るかわからんし」

このまま待ってても埒があかないならまだ自分で動いた方がマシだ。

「あの…、なんで来てないのがあと三人だってわかるんですか？」

水茂が恐る恐るといった具合に手を挙げて発言する。

なるほど、そういえばみんなはまだ知らないか。

「部屋のナンバーは14までしかなかったし、ここには14人居るって考えたけど」

俺がそう答えると皆は納得したのか、それ以上の質問は無かった。

「迎えに行くのは良いけど…、でも全員で一人一人を迎えに行くのって効率も悪いし、手分けして行かない？」

深見の提案に皆が頷き、俺の方も得に文句は無い。

さて…そうになると俺は。

【A・日向の母親を迎えに行く】

【B・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

【C・Bとは別の二人の中の一人を迎えに行くか】

【D・と思ったけど動きたく無いしここに居よう】

プロローグ 《異常》

「それじゃ、私達を三チームに分けましょうか、日向ちゃんと赤松さんと榊さんと大前田さんで日向ちゃんのお母さんを迎えに行く、その間に私と誹泉さんと水茂さんのチーム、遼 彼方さんと織笠さんと柏瀬さんと深見さんのチームで行きましょう」

…あれ？

なんか宇佐が勝手にチーム分けして前話の選択肢が粉々に砕けちっちゃったぞ。

【A・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

【B・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

【C・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

【D・他の二人の中の一人を迎えに行こう】

…一択じゃねーか。

「おいおい…勝手に話し進めてんじゃねーよ」

これには当然、得に赤松が第一に嫌気がさしたように声を上げた。

「あんたさあ…いつから俺らのリーダーになった訳？」

「別に…そんなつもりは無いけど、ただ単にこれが一番バランスが

良いでしょ？何があるかわからないんだから」

食いかかる赤松に宇佐は眉をひそめながらも返した。

確かにバランスという点でみれば宇佐のチーム分けは悪くない。

三人組になるのは体格の良い誹泉が率いている組。

大広間に入る前から事前に面識のある俺と詩織、そして織笠の三人に車椅子の詩織の為か深見の四人。

そしてまだ幼い日向が居る所もきちんと四人チームになっている。

どの組にもきちんと男が居るというのも大きい。

「チームのバランスなんてどうでも良いんだよ、なんであんたがしきってるかって聞いてんだよ」

だがこの仕切り分けが良すぎる宇佐のチーム分けは余計に人の反感を食うものだ。

得に赤松なんかは他人の言う事なんざ聞きたくないという態度だった。

「だからそんなつもり無いって言ってるでしょ？だったらあなたがチーム分けすれば良いじゃない!!」

「…てめえ」

宇佐は腕を組み高圧的に。

赤松は睨みをきかせて宇佐を見た。

…ダメだこりゃ、売り言葉に買い言葉も良い所だ。

「…あ、あの」

そんな二人の言い争いの中、意外な人物が恐る恐ると手を上げた。

「…どうしたの？水茂さん」

「私…、男の人と行動するのはちよつと…」

まるで学級委員長が普段発言しないクラスメイトにするように宇佐が聞くと素直に水茂はそう告げた。

「え？あ！ああ…ごめんなさい」

だがこの水茂の発言はさすがに計算違いだったのか、宇佐が言葉に詰まる。

「くつくつく…、なんだよ、それじゃこのチーム分けは成立しねえな」

「赤松…いい加減にしろ、話しが進まん」

「…へいへい」

再び赤松が茶化そうとした所を誹泉が言葉を挟み、赤松も素直に引

き下がった。

「思ったんだけどさ、入れ違いになったら困らね？ほら…僕らが出
てった後に他の三人が来たりとかさ」

「ああ…うん、そうだね、有り得るかも」

大前田の言葉に榊さんが頷く。

確かに…その可能性もあるか、そうなったら更に面倒だ。

「だったら…留守番役も必要って事だよな」

俺は顎に手を当てて考えながら。

「だったら詩織、水茂とここに残ってろよ」

「え…、私？」

車椅子での移動が仕様の詩織に残って貰う事にした。

別にそこまで集団の移動の妨げになる事は無いが…まあ、誰か残ら
なきゃいけないし。

「水茂もそれなら良いだろ？男と一緒に移動も無いし」

「え？あ…はい」

水茂は申し訳なさそうにシュンとなりながらも頷いてくれた。

しかし男性恐怖症ね…、最近漫画とかでよく見るネタだったけどここまでとは。

正直面倒臭さいというのが本音だが本人の前で言うのは止めところ。
殴って来ないだけマシかと。

「んじゃそれで決まりだ、詩織と水茂の二人を残して三人チームでいこう」

「となると――」

話し合いの結果…と言っても俺のグループは詩織が抜けてちやうど俺と織笠と深見の三人組になる。

なので日向の母親を迎えに行く四人の中から榊さんが宇佐の居るチームに移った。

【日向・赤松・大前田】

【宇佐・榊さん・誹泉】

【俺・織笠・深見】

そして【詩織・水茂】の留守番組だ。

「さて…それじゃさっさと行くか」

と、大広間を出ようとして立ち止まる。

「…どこにだよ、そういえば日向の母親はともかく、他の二人の部屋は知らないぞ」

「ああ…そうか、困ったね」

深見も気付いたのかしまったという顔だ。

「それについては消去法ですぐわかると思うけど…」

「ああ…そうか、ここに居る俺ら以外のナンバーの奴の部屋に行けばいいのか」

呆れたように織笠に言われたがそう言われれば確かにそうだ。

ええと…俺が13で詩織が14、織笠が9だったよな…。

とりあえずここに居る11人でお互いにナンバーを教え合うがその場面は面倒なので省略しておく。

とりあえずの各ナンバーは以下の通りだった。

N O. 1・宇佐 飯子

N O. 2・榊 昌弘。

N O. 3・今だ来ない日向の母親。

N O. 4・日向 日向。

N O. 5・大前田 友清。

N O. 6・居ない…、つまりまだ来てない。

N O. 7・水茂 めぐみ。

N o. 8・深見 柁。

N o. 9・織笠 未娘

N o. 10・赤松 慶二。

N o. 11・居ない、もう一人の方か…。

N o. 12・誹泉 伸一。

N o. 13・俺…と言ったら名前忘れられそうなんで遼 彼方。

N o. 14・柏瀬 詩織。

という訳で3・6・11のナンバーがまだ来てないという訳だ。

「それじゃ、今後こそ行きましょうか」

「気を付けてな」

一旦、大広間を出て三人一組に別れる。

俺と織笠と深見のチームはN o. 11の人物を迎えに行く事になった。

なので一度来た道をまた戻る事になる。

「なんで来ないんだろうね？」

その道中、深見が疑問を投げかけてくる。

「そりゃ…普通に考えてまだ寝てんじゃないか？あのテレビ、お前も見тарろ？」

「あ、やっぱり皆の部屋でも流れたんだ」

「そうじゃなきゃ皆、大広間に集まらないって」

普通、こんな訳のわからない状況になったらあのテレビに映った謎生物の言う通りに大広間に行くだろうし。

「…どうかしらね」

「…あん？」

そんな俺の返答に織笠が口を挟んでくる。

「この状況がすでに普通じゃないって事に気付いてないの？」

「そりゃ…気付いてるけどさ、今話に出てるのは状況じゃなくて人だ、人」

まるで俺の考えを読んでいるかのような鋭い問い掛けに俺は一瞬口ごもるがすぐに反論する。

確かに状況は普通じゃない、完全に異常だ。

だがその異常な状況の中で普通、人がどう行動するか、今回はそれについて言っている。

「……………」

「……………」

「ちょっと…、喧嘩は止めなって、あ！ほら！！ついたよ」

睨み合う俺と織笠の間に挟まれて、さすがに居心地が悪かったのだろう。

No. 11の部屋の前についた深見は嬉しそうだった。

「くにさき国崎 みずほ瑞穂…」

そこに記された名前も大広間の誰のものとも一致しない。

「間違いないな」

とりあえず…だが、コンコンと軽くノックを試みる。

中からは何の反応も無かった。

「おい！誰か居るのかあ！！」

今度は呼びかけてみる…が反応は無い。

「ほらな、やっぱ寝てんだよ」

「もしくは入れ違いで居ないのかもね」

肩を竦める俺に深見が言葉を付け加える。

「…そう思うなら中を開けたらどう？」

だが織笠の態度は変わらず、刺々しいものだった。

「まったく…、素直に負けを認めろよ」

まあどのみち中を確認する必要はあったが。

「入るぞ」

返事は期待せずに、扉を開けた。

「…は？」

そして俺は固まってしまった。

予想が外れ、部屋の主である国崎 瑞穂なる少女の座り込んでいる後ろ姿が見えたからだ。

少女はテレビの前からピクリとも動かない。

「…おーい」

呼びかけてみる…が、返事どころか少女の後ろ姿は全く動かない。

「…寝てるんじゃないかな」

「座ったままか？…いや、うん…そういう人も居るよな」

深見の言葉に頷き、俺は寝てる？少女を起こそうとして。

「…？」

再び…立ち止まった。

何か…言っている？

ぶつぶつとだが…囁くように微かに、後ろ姿の少女が声を発していた。

「…——君、…——ヨウ君、リョウ君」

リョウ…君？

誰だ…？誰の事を言っている？

少なくとも大広間に居た者の中でリョウ君とやらの該当する人物は居ない。

「リョウ君、私は悪くないの…私は全部あなたの為に、そうよ…だって私はあなたの物だもの」

「……………」

国崎 瑞穂なる少女のその異様な雰囲気、背筋が冷たくなった。

だが、ここで声をかけない訳にも行かない。

「おい、聞いてんのか？」

俺は国崎 瑞穂なる少女の肩に手を置き、こちらに振り向かせようとした。

すでに後悔しても遅かったが。

数秒もたたない内に：織笠の言った事の意味がようやくわかった。

何故：もっと早く気付いて、慎重に行動しなかったのだろう。

ここに居る者達は：その全員が自殺してここに居る。

つまり：全員が一度、自分を殺している。

その時点で既に”普通”とは掛け離れた”異常”である。

「：あ」

気付いた時にはもう遅く。

圧倒的に手遅れで。

国崎がその手に持っていた脇差しくらいの長さの日本刀が。

今まさに俺の腹を突き刺そうと動いていた。

プロローグ《異常》（後書き）

【おまけ】

詩織「彼方、何してるの？」

彼方「ん？ああ…、ちょっとメモしてるんだよ」

詩織「メモ？」

彼方「一度にいろんな奴が出てきたからさ、誰が誰だかをさっさと覚えとかないとな」

詩織「そういえば彼方、昔っから人の顔と名前覚えるの苦手だもんね」

彼方「自慢じゃないけどな」

詩織「自慢にしちゃ駄目だけどね」

彼方「よしっと…、これでいいか」

詩織「忘れないように前書きに置いておいた方が良いんじゃない？」

彼方「前書きに置くって何！？普通そこは肌身離さず持ってるって言うだろ！！」

詩織「次話から彼方メモが前書きに置かれるようになりました」

彼方「勝手に話しを進めるな！何その説明口調」

詩織「彼方メモはシナリオが進む事にこまめに更新予定です」

彼方「毎回消しゴム使って書き直せっつか、おい」

詩織「では次回もよろしく」

彼方「…一応、これも書いておくか」

【生存者数・14人】

プロローグ《設定少女》（前書き）

【彼方メモ】

No. 1・宇佐 飯子うさ いいし

《大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのよう場で仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームて呼ぶ、やめて》

No. 2・榊 昌弘。（さかき まさひろ）

《幸薄そうなおッサンという第一印象だったが本当に幸薄かった、頭の毛の方はまだ薄くなさそうなのでなによりだ》

No. 3・今だ来ない日向の母親。

《母親がこんな場所で子供を一人にするなよ…》

No. 4・日向 日向ひむかい ひなた。

《ロリ巫女、それ以上何を望む？》

No. 5・大前田 友清おおまえだ ともきよ。

《太った男、オタク、何か同類のように思われてるが俺はどっちかって言うどライト、隠れオタ》

No. 6・居ない…、つまりまだ来てない。

No. 7・水茂 みなも めぐみ。

《男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる、穴を掘るは使えるのか？》

No. 8・深見 ふかみ 柩まひら。

《男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれっきとした男…だよな？》

No. 9・織笠 おりかさ 未娘みこ

《冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、なのに俺はタメ口されてる》

No. 10・赤松 慶二あかまつ けいじ。

《リアルじゃ関わらないようにするだろうヤンキー、何でこいつがここに居るんだろ?》

No. 11・居ない、もう一人の方か…。

No. 12・誹泉 ひいずみ 伸一 しんいち。

《服の上からでもわかる鍛えられた身体、体格もこのメンバーの中で一番良い、強そうな奴》

No. 13・俺…と言ったら名前忘れられそうなんで遼 はるか 彼方 かなた。

《自分の所に何書けてんだ? とりあえずリストカットで自殺してここに来た、配布されたのはナイフ》

No. 14・柏瀬 かしわせ 詩織 しおり。

《車椅子愛用な幼なじみ、死んだのは三年前、自殺、あれ? そういや…何自殺したんだっけ…?》

【生存者数、残り14人】

プロローグ 《設定少女》

突然の出来事に脳は完全に停止していた。

いや、脳が動いてた所でたぶん、身体の方が反応しないだろう。

人間はだいたい、不意の事態には対処出来ない。

今回のそれが正にそうだ。

「彼方ッ!!」

だから―――。

国崎の持つ脇差しが俺の腹の真横を通り過ぎてくれたのは俺では無く、織笠のおかげだ。

彼女が俺の身体を引っ張り、脇差しの一撃から俺を守ってくれた。

それも後数秒遅かったらどうなっていたかわからない。

「生きて…る？」

へなへなと身体中の力が抜けた。

「う…うわああああああ!!」

一瞬遅れて深見の悲鳴が部屋に響く。

当然だ、今まさに目の前で人が死にそうになったのを見たのだから。

当人である俺はただ安堵していたが、一步間違えれば死んでいた。

そしてもう一人の当人はと言えば。

「…あなた達、誰？」

…涼しい顔してやがる、信じられねえ。

怒りが込み上げて来た。

「てめー」

「安心して、怪しい者じゃないわ」

くっつかかろうとする俺だったが織笠がそれを制止させるように俺の前に手を出し、国崎に声をかけた。

「…リョウ君はどこ？どこに居るの？」

国崎はキョロキョロと辺りを見渡し、リョウ君なる人物を探す。

「誰だよ、そのリョウって奴」

「リョウ君はリョウ君だよ、私の恋人、私の運命の人、私の最愛の人」

「……………」

うつとりとした表情を見せる国崎に俺はこの女の正体が予想出来た。
何より目が正気じゃない。

「ねえ…この人、大丈夫…なの？」

「大丈夫なように見えるならお前も大丈夫か？ って返してやる」

俺がそう答えると深見もそうだよな、と頷いた。

国崎 瑞穂は間違いなく、正気じゃない。

その理由はリョウ君なる人物と関係するのは明白だった。

だったら可能性は二つ。

一つは単純にそのリョウ君とやらの恋人であり、彼が側に居ない事で気が動転している事。

そしてもう一つは…。

国崎 瑞穂はリョウ君とやらの狂気を纏った愛を持っている可能性。

ヤンデレ…とかそんな言葉がこいつにはピッタリだと思えた。

「とりあえず…部屋から出て僕らについて来て欲しいんだけど」

俺はもう近付きたくないので深見が勇気を出して話しかけてくれた事に感謝。

「嫌ッ！私はりョウ君を探すの！！」

「…あはは」

キッパリとした返答に深見が言葉を失う。

「彼方さん…あの」

「悪いが断る、あんまし関わりたくない」

上目遣いで助けを求めてくる深見の視線に見とれそうになるのを必死に抑え、バツサリと切り捨てた。

こいつは見た目には女にも見えるが俺にその趣味は無い。

「でも、彼女を連れてかないと…」

「ふむ…」

話しは進まないか。

「ちゅー訳で織笠に頼もう、女同士だし」

「…はあ」

丸投げしてきた俺に対してため息をつきつつ、織笠は国崎に向かう。

「後は私が連れてくから、先に大広間に戻ってて」

「…いいのか？」

「ただ一つだけ、二人に約束して貰いたいんだけど」

織笠がクルリとこちらを向いて、慎重な表情を作る。

「ここでの事…、他の誰にも言わないって事、特に彼方」

「まあ…騒ぎをでかくするつもりは無いけどな、何で特に俺？」

国崎が突然人に向けて脇差しを振りかざす正気じゃない人であるのは事実だが…、ここで騒ぎ立てても面倒が増えるだけだろう。

「深見もそれで良いのか？」

「僕は良いけど…彼女、本当にほっといても大丈夫なの？」

「ただ単にこの状況に動揺してるってなら落ち着いたら大人しくなるだろ」

それがベストなんで…そう願うでしょう。

織笠に国崎の事を任せ、俺と深見は一旦、大広間へと戻る事にした。

「織笠さん、すごかったね」

「おかげで助かったわ…、俺ももっと警戒するべきだったな」

織笠の言う事を素直に聞いてもっと慎重に行動するべきだった。

「他の皆…大丈夫かな？」

「他の二人が国崎みたいな奴だったら…わからんな」

いや、あんなのが何人も居てたまるか。

「――！！」

「…ん？」

大広間に近付いていくと中から怒鳴り声が聞こえて来て思わず足を止めた。

…この声？

「宇佐さんの声だね…相手は誰だろう？」

深見も足を止め、俺に声をかけてくる。

たぶん、さっきの様子から見ると宇佐と一番揉めそうなのは赤松だろうな…。

そつと聞き耳…を立てる必要も無く怒鳴り声は聞こえてくる。

「あなたの身勝手な行動のせいでどれだけ他人に迷惑かけたか…わかってるの！！」

あゝあ、やってるよ…。

「ッ！またそうやって逃げようとして…いい加減ちゃんと答えなさ

い!!」

いやぁ…白熱してんな。

「あなた…さっきからふざけてるの？私を馬鹿にしてるの!!」

…ん？

違和感…いや、明らかにおかしい宇佐の怒鳴り声に俺は首を傾げた。

「なんか…変だよな？」

深見も気付いたのか、俺に同意を求めてくる。

「変だな…、さっきから宇佐の声かしねーぞ」

単純に宇佐の言葉を聞いていると会話しているようだが相手の声は一向に聞こえてこない。

まるで宇佐の怒鳴り声が一方通行に相手に向かってるようだが…、もし怒鳴られてるのが赤松ならこんなに大人しくはしてないだろう。

そんな疑問を持ちつつ、大広間へと入り。

「…えっ？」

俺は戸惑いに思わずそう声を出した。

宇佐に怒鳴られていたのは先程まで大広間に居なかった新キャラ。

サラサラと風が靡けば光が舞うような金色の髪が目立つ。

左目につけてある眼帯が目立つ。

右手にだけ嵌めてある手袋が目立つ。

ゴスロリのフリフリとした衣装が目立つ。

だが何よりもその顔、日本人離れしたとんでもない美少女なのが目立った。

まるで存在そのものが一つの芸術品のようにさえ思えてくる少女。

「…詩織、誰だ？あのトンデモ美少女は？」

状況を聞き出そうと詩織に近付き、思わず本音が出た。

「彼方…見すぎ」

我が幼なじみはそんな俺の本音に軽蔑の眼差しで返してくれた。

「いや、あれは誰だって注目すんだろ…」

「…はあ、いいけどね、彼女は宇佐さん達が連れて来た人」

「…マジか」

選択肢を誤った気分だ。

片方はトンデモ美少女、もう片方は脇差し振りかざすある意味トンデモ少女（と言っても容姿はなかなかだったが）だもんな。

「しかし…なんで宇佐はあんな怒鳴ってんだ？」

宇佐は俺達にも気付いていないのか、少女に向けて怒鳴り続けた。

「彼方もあの人と話してみればわかるよ」

詩織のうつすらと笑みを浮かべた仕草が気にはなったが、言われた通りに話してみる事にする。

「おーい、宇佐、あんまし揉め事はよそうぜ」

なのでまずは宇佐を退かす所からだ。

「揉め事って…私はそんなつもりじゃ」

「お前にそんな気が無くても結果的に空気が悪くなりゃ一緒だよ、ほら、向こう行ってな」

ここで話を切らないと今度は俺が宇佐の怒鳴りの対象になりそうなので詩織や水茂達の方へ肩を押した。

「…あなたもなの、遼 彼方」

その瞬間、宇佐が小声でそう呟いたのが聞こえた。

…ちよっと恨まれたか？

まあ…あのまま怒鳴らせ続けてたら宇佐本人が恨まれただろうし、これで良いだろう。

さて…と気を取り直して少女を改めて見た。

「……………」

言葉を発しない、上の空な少女はまるで一つの人形を思わせる。

「…よっ、俺は彼方、遼 彼方だ、よろしくな」

「……………」

俺の自己紹介に少女からの返答は無い。

変わりに紙とペンを取り出すとスラスラと何かを書き、俺へとその紙を手渡す。

【うむ、良い心掛けだ、人の子よ】

中身はそんな感じの良くわからない文章（字は可愛らしい）だったが、それよりも俺が気になったのは。

「お前…もしかして、喋れない、のか？」

前にテレビでやっていた声を失った子供のドキュメンタリー番組を思い出す。

確か失声症という病気があったはずだ。

「……………」

俺のその言葉に少女はコクリと頷いた。

「そっか…なんかその、悪いな」

俺はなんだか申し訳なくなつて少女に謝る。

「……………」

そんな俺の態度を見て少女は再び紙とペンを取り出すとスラスラと何かを書き、俺に渡した。

【うむ、私の声に込められた魔力が暴走するのを防ぐ為だ、仕方あるまい】

「…は？」

えーと…、そのー…、うーんと…。

「ドユコト？」

ちょっと意味がわからない。

【私の前世は強大な魔力を持った悪魔であり、その能力を私も受け継いでいるのだ】

「…は？」

えーと…、その…、うーんと…。

「ドユコト？」

ちょっと意味がわからない。

テイク2を要求すると再び少女はスラスラと紙とペン。

【つまり私の発する言葉一つ一つにさえ、計らずとも強大な魔力が付加され、その影響は貴様ら人間世界の―――】

読むのが面倒になって来たのもう良いや…。

つか…どっかで見た事ある設定だな、おい。

「ちなみに…その眼帯は？目もらいでもしてんのか？」

次に気になったのは少女の左目に付けられた眼帯。

【魔眼の発動を抑える為の物だ、不便だがこれを外せば世界がヤバい】

…ヤバいらしい。

「…そのかたっぽだけしてる手袋は？」

【右手の暴走を封印する為の物だ、これを外せば私は覚醒してしまう】

暴走するのか覚醒するのかどっちなのだろう…？

「…はあ」

感想としては勿体ないとか残念、の言葉につきる。

トンデモ美少女なのを差し引いてもこいつ、恐ろしいまでの中二病な電波だ。

これではせつかくの容姿も光輝くはずが無い。

「お前…名前は？」

最後に…仕方ない、といった感じに少女の名前を聞いた。

少女はスラスラとペンで紙に自分の名前を書き、俺に見せる。

【勅使河原 社】

「えっと…、うーん？」

なんと読むのだろう？

「んんかわはら…しゃ？」

俺が首を捻り考え込むと勅使河原はムツとなって俺からさっきの紙を奪い取ると。

【勅使河原 社】

丁寧にも読み方を追加して書いてくれた。

「つーか本名名乗れよ！あ…いや、この場合名乗るって言わないか」
勅使河原 社とか…妙に偽名臭い、いや…、僕の考えたカッコイイ名前みたいな印象だ。

俺も人の事言えた義理じゃないが、これは本名だし。

【ほう、気付いたか、私の真名に、だが私の真名を言った所でお前は理解出来まい、いや人の子が聞けば耳がただれ落ちるやもしれぬ】
ふふん、と得意げに鼻を鳴らしながら少女は紙を見せてくる。

あゝあ、もう勅使河原でいいや…。

【しかし私の真名に気付くとは、ぬし、なかなかに見所がありそう
だ】

「…そりゃどうも」

もちろん嬉しくは無いが。

しかしこりゃ…印象的に生真面目な宇佐が怒鳴り込む訳がわかった…。

チラッと宇佐を見ると今にも噛み付きそうな目を向けていた。

…この二人は根本的に合わないだろうな。

「んで、お前はなんで遅れて来たんだ？」

【暴走しかけた魔力を鎮静化する為に瞑想していた】

つまり寝ていたのだろう。

いい加減相手にするのが面倒になって来たぞ…。

「きゃあっ！！」

「…ん？」

水茂が入り口の方に向けて叫び声を上げている。

つられて入り口を見ると織笠と…、脇差しを持った国崎が居た。

状況の把握に数秒かかり、把握した瞬間後悔した。

片手で顔をおおい、あちゃーみたいな仕草をとる。

「ちょっとあなた！なんなの？そ——」

食いかかろうとする宇佐の首根っこを掴み（面倒事回避の為）、俺は織笠を睨んだ。

「…織笠」

「これが条件だったのよ」

織笠は何食わぬ顔でしれっと答えやがった。

ついでに本人である国崎も何食わぬ顔でしれっと椅子につく。

【あれは妖刀、笹錦】

「美味そうな名前の刀ですね、ええ」

得意げに紙を見せてくる勅使河原を相手にせず、俺はとっちめてやろうかと織笠と国崎に向かう。

そんな俺の行動は新たに大広間に入って来た人物によって掻き消された。

「ちょ！みんな！！大変だよ！！」

大前田 友清が酷く慌てた様子で部屋へと駆け込んで来たのだ。

「…はあ」

隠す事の出来ない溜め息が出てきた。

プロローグ《宗教狂い》（前書き）

【彼方メモ】

No. 1・宇佐 うさ 飯子 いいこ

《大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのようで場を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームで呼ぶ、やめて【配布武器…?】》

No. 2・榊 さかき 昌弘 まさひろ。（さかき まさひろ）

《幸薄そうなオッサンという第一印象だったが本当に幸薄かった、温厚な人【配布武器…?】》

No. 3・今だ来ない日向の母親。

《母親がこんな場所で子供を一人にするなよ…》

No. 4・日向 ひむかい 日向 ひなた。

《ロリ巫女、それ以上何を望む？【配布武器…?】》

No. 5・大前田 おおまえだ 友清 ともきよ。

《太った男、オタク、何か同類のように思われてるが俺はどっちか

って言うどライト、隠れオタ【配布武器…?】》

No. 6・勅使河原 てしがはら 社 やしろ。

《前世が悪魔にて自身も強大な魔力を持つトンデモ残念系中二病美少女、喋ると魔力が溢れ出るので筆談、設定はつけければ良いってものじゃない【配布武器…?】》

No. 7・水茂 みなも めぐみ。

《男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる、穴を掘るは使えるのか？【配布武器…?】》

No. 8・深見 ふかみ 柁 ふかい。

《男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれっきとした男…だよな？【配布武器…?】》

No. 9・織笠 おりかさ 未娘 みこ

《冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、な

のに俺はタメ口されてる【配布武器…?】》

No. 10・赤松^{あかまつ}慶二^{けいじ}。

《リアルじゃ関わらないようにするだろうヤンキー、何でこいつがここに居るんだろ?》【配布武器…?】》

No. 11・国崎^{くにさき}瑞穂^{みずほ}。

《殺されかけた、怖い、マジ怖い、新ジャンル、ヤンデレだけど病む相手が居ない》【配布武器…脇差し】》

No. 12・誹泉^{ひいずみ}伸一^{しんいち}。

《服の上からでもわかる鍛えられた身体、体格もこのメンバーの中で一番良い、強そうな奴》【配布武器…?】》

No. 13・遼^{はるか}彼方^{かなた}。

《自分の所に何書けてんだ?とりあえずリストカットで自殺してここに来た》【配布武器…ナイフ】》

No. 14・柏瀬^{かしわせ}詩織^{しおり}。

《車椅子愛用な幼なじみ、死んだのは三年前、自殺》【配布武器…?】》

【生存者数、残り14人】

プロローグ 《宗教狂い》

「どうしたんだい？大前田君、そんなに慌てて」

慌てた様子で大広間に入って来た大広間を榊さんが心配するように声をかけた。

「そ、それが…、ゼエツ、…ヒイ、フウ…」

走って来たのだろう、大前田はまず乱れた息を必死に整えている。

「大前田…、お前、一人か？」

誹泉に言われてそういえばと思い出す。

大前田は日向や赤松と一緒に日向の母親を迎えに行ったはずだ、それが今一人という事は。

「何か…あったのか？」

「それが…日向ちゃんの母親、ちょっとおかしくって」

ちょっとおかしい…ね。

国崎、勅使河原と続けてちよつとどころかかなりおかしい人物と会ったおかげか、大して驚きはしなかった。

しかし大広間に来なかった三人の全員がハズレとは…。

「それで赤松殿が、その…キレて」

「まさか…暴力振るったの？」

宇佐の言う可能性は否定出来なかった。

「わ、わからないけど…、なんかまずそうだったから、みんなを呼ぼうって思ってた」

…まずいな。

ただでさえ今のこの異常な状況だ、ふとした事がきっかけで全員がパニックになる可能性もある。

「…赤松を止めに行かないと、誹泉、一緒に来てくれ」

「別に良いが…」

この中で赤松を止めるのに一番都合が良いのは一番ガタイの良い誹泉なので俺は声をかけた。

「ち、ちよつと待って、彼女をほって置くの？」

だがそこで宇佐が反論を上げてくる。

ここでの宇佐の言う彼女とは当然、脇差しを常備している国崎の事だ。

…確かにもし国崎が暴れ出したなら状況はもっとまずくなるな。

脇差しという目に見える恐怖に俺は国崎と赤松の危険性を天秤にかけた。

「…わかった、なら誹泉には残って貰うか」

そして結局国崎の危険性の方を上位とした。

一度襲われた分の経験が決定的である。

「俺はどちらでも構わんが、お前は大丈夫なのか？」

「俺は…大前田、場所の案内を頼む」

「マジで？ 僕？」

別に案内と言えるほどの必要は無いが、一度日向の母親の部屋に行っている大前田が居た方が移動はスムーズだ。

「あとは…」

俺はぐると大広間にいるメンバーを見渡した。

途中、詩織と目が合い、彼女が手を上げるが華麗にスルーする。

詩織には悪いが時間が無いのだ、車椅子の移動に付き合う事は出来ない。

「榊さん、良いですか？」

「わ、私かい？」

自分の名が呼ばれた事が意外だったのか、榊さんはびっくりした声を上げる。

赤松を説得出来そうな温厚そうな人、という事での採用だ。

「よし、急ぐぞ」

時間も無いので飛び出すように大広間を出て通路を駆ける。

日向の母親の部屋まで行くのに時間はかからなかった。

が…、そこで俺は立ち止まり、言葉を失う。

壁に身体を寄りかけ、イライラしたように足踏みをする赤松と。

髪が乱れ、殴られた後のように頬を赤く腫らした日向が床に座り込み、顔を俯かせていた。

「…あ」

日向は俺達に気付くとゴシゴシと巫女服の袖で目を拭く。

涙を拭き取るように。

「赤松…、何があった？」

大前田から聞いた話しの流れのままであれば赤松が暴力を振るったとしても日向の母親に対してのはずだ。

何故日向が俯き、頬を赤く腫らし、泣いている？

「あん？…なんだよ、その目」

「遼君…何もそこまで喧嘩腰にならなくても」

思ってた以上に赤松に対して敵意を見せていた俺を榊さんがなだめる。

「まさか…だけどな、お前、日向を？」

——殴ったのか？

と後に続かせる言葉を俺はぐっと飲み込んだ。

「…だったら？」

赤松はへらへらと笑うようにそう答えた。

「てめ——」

「違うんです！！」

赤松に詰め寄ろうとした瞬間、日向が大声を上げた。

「これは…私が自分でやったんです」

「…何言ってんだよ、そんな訳——」

「あります！私が自分でやっただですよ！！」

俺の言葉に被せるように日向の必死な訴えが響く。

「…日向？」

その必死な様子に戸惑い、それ以上の言葉が出て来なくなる。

日向からは話しが聞けそうに無い、となればやっぱ赤松か。

「赤松殿…、今北産業」

「はぁ？何言ってんだてめえ？」

恐らくは俺と意見が一緒だったであろう大前田が赤松に声をかけるが、その聞き方は通じないだろ…。

「結局…何があったんだ？教えてくれ」

なので俺は改めて赤松に聞く事にした。

「そこのガキの母親がな、いきなり俺らの事を汚れた魂とか不浄な者とか言い出したんだよ」

「うん、そこまでは僕も知ってる」

…って事はそれで赤松がキレた訳か。

「んで、あんましナメた真似してっから黙らせてやろうってちょっと脅かしてやったんだよ」

そう語る赤松はへらへらとした笑顔だった。

「…暴力とかしてないよね？」

榊さんが不安そうに聞くが赤松の方はへらへらとした笑顔を消さない。

「手は出してねーよ、本当にちょっと脅かしてやっただけだ」

…脅かしての部分が気にはなるが、今は状況の把握が優先か。

「そしたらあのババア、自分の娘をえらい形相で睨みつけて無理矢理自分の部屋に引っ張ってっただよ、んで今出て来たのが娘の方だけ」

「…それじゃ、日向のそれは」

一度母親に連れられて部屋に入った後、出来たもの？

「私…です、私がお母さんの部屋に入った後、勝手にやりました」

「日向、いい加減本当の事を…」

ギッ

「何言ってるのかしら？全部本当の事、どこに嘘があるの？」

俺の言葉を遮り、扉が少し開くと一人の女性が顔を出した。

赤松はババアと言っていたが年齢的には30代の後半といった所か。マダムとも呼べる品のある顔立ちのはずだが、その顔は妙に歪んでいた。

そういえば…扉にネームプレートがあるはずだ。

目線をネームプレートに向けると【日向 ひむかい 日景 ひかげ】と書かれていた。

間違いない…日向の母親だ。

だがこいつの異様な雰囲気は何だ？

「…だってどう考えても変だろ、自分で自分を殴ったってのか？」

「ええ、そうよ、日向はね、そういう病気なのよ、ねえ？」

日景が…、日向の母親が、母親らしく、日向に微笑みかけた。

ビクッと日向が身体を震わせた。

「…はい」

自分で自分を傷付けてしまう。

…そういう病気の事は聞いた事がある。

この建物が本当に自殺者を集めているならうってつけだろう。

だが…違和感は無くならない。

「それとも日向…、さっきまでの言葉は”嘘”、だったの？」

”嘘”の部分強調した日景の物言いは圧力をかけるようだった。

「あの…その」

日向は何かを言いたげに一瞬、俺を見たが。

「…日向、嘘つきはミハシラ様の——」

「ッ！私…です、私が…自分で…自分を、殴りました」

「…ほうら、言ったでしょ？」

日景は能面が張り付いたような笑顔を俺達に見せる。

「魂が汚れてた者だから、こうやって人を疑うのよ、汚れた魂は浄化しないと」

その笑顔と後続く言葉に俺は酷い嫌悪感を覚える。

「うわ…また出たよ、ぶっ飛んでるなあ」

「…チッ」

赤松と大前田の様子を見るに汚れた魂とはこの事だったか。

「日景さん…だね、どうか我々と一緒に来て欲しいんだが」

榊さんがかしこまるように頭を下げて日景に同行を求めた。

さすがに一番の年長者なだけはある、連れて来て正解だった。

下手したら俺も赤松と同じやり方をやりそうになるし。

「…あなた達、全部で何人居るの？」

「私達ですか？あなたと日向ちゃんを入れて14人ですが？」

「…汚れた魂がそんなにも、早く浄化しないと」

会話になってはいないが、それでも日景は俺達について来てくれるようだ。

6人になった俺達は再び大広間へ戻ろうとする。

「…あの」

不意に服を引っ張られ、俺は立ち止まった。

「手を、繋いでも…良いですか」

日向だった、前を歩く日景の様子を恐る恐る見ながら俺に声をかけ

てくる。

「え？ ああ」

突然の事で戸惑いながら出した手だったが日向はすぐに掴んでくれた。

「あの…、さっきはありがとうございます」

「さっきって…俺は何もしてないぞ」

「心配してくれてたみたいだったので、その…嬉しくて」

日向は顔を赤くさせて俯いた。

「…なあ、お前の母親」

なんなんだ？と次に言おうとした言葉を飲み込む。

あんなのでも自分の母親がけなされれば日向も辛いかと思った。

「あはは…、彼方さんの言いたい事、わかります」

日向は寂しそうに微笑む。

子供のするものとは思えないその表情に胸が痛々しくなった。

「お母さん…、お父さんが死んじゃってから、その…悪い人達に騙されて」

「人間不信になったか？」

「…それもありますが、その…宗教を」

「宗教狂いか…」

汚れた魂やら浄化やらやたらに使ってたのはそのせいかな。

「私もよくわからないんですが、ミハシラ様って神様を崇める教団みたいです」

「じゃあお前のその格好…」

正規の物では無いが巫女装束というイメージを見せる日向の格好。

「私は…、神子らしいです、神の子と書いて神子」

そう答える日向は酷く辛そうな表情だった。

何か嫌な思い出を思い出さないようにしているような…、そんな表情。

「つたく…、自分の考えを子供にまで植えんなって話しだな」

子は親を選ぶ事が出来ない。

理解も出来ないうちに無理矢理宗教の教えを押し付けられた日向の境遇は酷く辛いものだろう。

「…辛いなら我慢すんなよ」

「…ありがとうございます、その、また…甘えさせて下さいね」

日向は顔を赤くさせながらも手をバツと離れた。

「…ふう」

しかし…日向の母親、日景。

宗教狂いとは厄介な思想の持ち主だな。

「賢者タイムですね、わかります」

「わかられてたまるか…オタ脳」

言ってる意味がわかってしまうのがムカつく。

「これで…全員か」

ナンバーは全部で14、そして出揃った14人の人間。

大広間に戻り、”何か”が始まるのは間違いない。

この訳のわからない状況から抜け出せるはずの”何か”が

「ここに皆集まってるよ」

先頭を歩いていた榊さんが日景にそう説明する。

ガチャリッ

と、大広間への扉を開き、俺達六人は足を踏み入れた。

その瞬間――。

『パンパカパーン♪パンパパンパカパーン♪ようこそ”てんごく”へ、クズの皆様!!』

場違いに明るいセルフファンファーレと共に。

俺達の目の前に”ソレ”は現れた。

一 本 目【ようこそ、てんぐへ】（前書き）

【彼方メモ】

No. 1・宇佐 飯子うさ いいこ

《大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのようで場を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームで呼ぶ、やめて【配布武器…?】》

No. 2・榊 昌弘さかき まさひろ

《幸薄そうなオッサンという第一印象だったが本当に幸薄かった、温厚な人【配布武器…?】》

No. 3・日向 日景ひむかい ひかげ

《日向の母親、ミハシラ様という神様を崇める宗教団体を信じてる、宗教狂い【配布武器…?】》

No. 4・日向 日奈ひむかい ひなた

《母親に強制的に宗教に入れられ、神子にされた少女、自分で自分を傷付ける病気を持っている【配布武器…?】》

No. 5・大前田 友清おおまえだ ともきよ

《太った男、オタク、何か同類のように思われてるが俺はどっちかって言うとなライト、隠れオタ【配布武器…?】》

No. 6・勅使河原 社てしがはら やしろ

《前世が悪魔にて自身も強大な魔力を持つトンデモ残念系中二病美少女、喋ると魔力が溢れ出るので筆談、設定はつけければ良いってもんじゃない【配布武器…?】》

No. 7・水茂 めぐみみなも

《男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる【配布武器…?】》

No. 8・深見 柊ふかみ まひら

《男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれっきとした男…だよな？【配布武器…?】》

No. 9・織笠 おりかさ 未娘 みこ

《冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、なのに俺はタメ口されてる【配布武器…?】》

No. 10・赤松 あかまつ 慶二 けいじ

《ヤンキー、沸点がかなり低いのかキレやすい【配布武器…?】》

No. 11・国崎 くにさき 瑞穂 みずほ

《言動が病んでる、脇差し、笹錦（命名、勅使河原）を常に持ち歩く【配布武器…脇差し】》

No. 12・誹泉 ひいずみ 伸一 しんいち

《服の上からでもわかる鍛えられた身体、結構無口【配布武器…?】》

No. 13・遼 はるか 彼方 かなた

《自分の所に何書けてんだ？とりあえずリストカットで自殺してここに来た【配布武器…ナイフ】》

No. 14・柏瀬 かしわぜ 詩織 しおり

《車椅子愛用な幼なじみ、死んだのは三年前、自殺【配布武器…?】》

【生存者数、残り14人】

「本目【よういそ、てんぐくへ】」

「あ…ああッ！！」

その存在を知り、俺は驚きに声を発した。

その存在を、俺は知っている。

天使のような翼に悪魔のような身体。

悪魔のような角に天使のような輪っか。

そこに存在しているのはあのアナログテレビに映っていた謎生物、そのものだった。

テレビ内ならばどんな生物が出たって驚きはしない。

作り物やCG等使っていくらでもでっちあげる事が出来るからだ。

だが…これは。

今俺達の目の前に居るコイツは、紛れも無く”現実”だ。

『うけけけけッ！いやあ、良いねえ良いリアクションだよ、皆』

…俺だけで無い、その場の誰もがそいつの出現に驚きを見せている。

『突然の事に呆けてる人も多そうだし、もう一番言おうかな、クズの皆さん、ようこそ”てんごく”へ』

ソレは俺達を見渡し、確認し、もう一度、伝えた。

男とも女ともとれない声。

てんごく………天国？

ここが天国だっというのか…コイツは？

『僕は皆さんの生活のナビゲーターを勤める、天鬼ちゃんです』

そしてその謎生物は自らの自己紹介と共に頭を下げた。

「…やっぱり、僕死んだんだ」

深見が自分の身体を確認するように見渡し、そう呟いた。

死ぬ前…つまり自殺の寸前の記憶は俺を含め、誰もが持っているよ
うだ。

「ち、ちょっと待ちなさいよ、ここが天国だっというの？」

『ん…？そうだよ、ここは”てんごく”ですよ、ようこそ！』

宇佐の疑問に謎生物…、いや、天鬼、は陽気に答えた。

「ここが…天国？なんだか随分とイメージと違うね」

「可愛い天使たんはどこですか？」

神の持つ天国のイメージと大前田持つイメージに違いはあるようだったが俺のイメージとしちゃその両方を合わせたものだったりする。

いやあ…だってさ、ほら、天国なんだし。

『コラコラ！何を言ってるんだい！ここにホラ、天鬼たんが居るじゃない！！』

心外そうにいじけた天鬼が必死に自分をアピールした。

「あの…、ここが天国なら、普通、あなたは天使になるのでは？」

『やれやれ、やっぱり君達はクズだねえ』

謎生物を警戒してか恐る恐ると水茂が手を上げるが自称天鬼はやれやれと首を振った。

「てめえ、なあおい、さっきから黙って聞いてりや人をクズ呼ばわりとはナメてんのか？」

『うけけけけッ！怒っちゃった？だって事実じゃん、クズじゃん、しょーがないじゃーん！！』

赤松の脅しも天鬼にとってはどこ吹く風といった具合だ。

『何故なら！君達は全知全能たるゴッド！神様から頂いた命を自分でわざわざ捨てちゃったからでーす』

そう宣言し、天鬼はうけけけけッ！！と続けて笑った。

これは…間違いなく俺達がここに來た原因を指している。

つまり…自殺。

『そんなクズな君達が天国なんて素晴らしい場所、行ける訳無いじゃん』

「…つまり、お前はここが地獄だと言いたいのか？」

『もー…さっきから言ってるじゃんか、ここは”てんごく”だって』

…頭がこんがらがって來た。

ここは地獄じゃなく、天国でもない、でもてんごく？

「…結局、お前は何が言いたいんだよ？」

『つまりねえ…、自殺した人間は天国にも地獄にも受け入れ先は無い、だからこそここに集められます』

自殺した人間は天国にも地獄にも行けない…、そんな言葉を聞いた事がある。

だったら…ここは？

『ここはそんなクズの皆さんが流れ着く死後の世界、天国でもなければ地獄でもない、天の獄と書いて天獄でーす!!』

天獄。

単純に読むとなれば天国と同じだが…その意味は真逆と言えた。

天国や地獄はある程度、イメージというかどういった場所かという漠然とした想像は出来る。

だが…ここは天国でも地獄でも無い、天獄というまったく別の世界になっている。

『ここまで言えばクズな皆さんでも、だいたいは理解できたかなー？』

ガタンッ

「ッ！！」

突然、赤松が立ち上がり、椅子を蹴飛ばした。

「てめえ…いい加減にしろよ？さっきから散々人を馬鹿にしやがって！！」

その赤松の今にも殴りかかりそうな雰囲気は俺ものまれかける。

…やるのか？

「そのうるせえ口を黙らせてやるよ！！」

『…………』

赤松の拳が天鬼へと迫り。

「や、止めた方が良いよ！赤松殿！！」

そんな赤松を止めたのは意外にも大前田だった。

「ああ？なんだよてめえ、何で止めんだよ？」

大前田に止められた事が余計に神経を逆なでたのか、赤松は噛み付くように大前田を睨んだ。

「その…部屋を出る時、そいつが言ってたんだよ、天鬼ちゃんはナビゲーター兼アイドルなので天鬼ちゃんへの攻撃行為は禁止ですって…」

「それって…」

ルール…か？

まてよ…確か俺が聞いたルールは。

【十三・上記のルールにある禁止部分を犯した人には成仏して貰います、ですが禁止部分に触れなければ何をしてでも自由です。】

そうだ…これだ。

つまり…大前田の言うルールが本当なら、あのまま行けば赤松は禁止部分に触れ。

”成仏”：したって事か？

『その通りだよ、いやあ、命拾いしたね赤松君、あっ！もう死んでるんだっけ？うけけけけッ！！』

天鬼は腹を抱えてげらげらと憎たらしく笑った。

「禁止だあ？それがなんだってんだよ」

「：部屋を出る時、私達それぞれにコイツからルールが与えられたはずよ」

織笠が淡々とした冷静な口調でそう答えると他の皆もそういえば：と声に出す。

『そうそう、だから本当は説明会なんていらないんだけどね』

「どういう事？」

『君達それぞれに与えたルールはバラバラだから、皆で教え合えばすぐにわかるよ』

つまり：必要なのはルールの確認か。

「それじゃあ：ナンバー1の宇佐から順にルールをまとめていくか」

「：その必要があるわね、えっと、私が聞いたのは」

【壱・天獄は自殺した者がその記憶を持ったまま辿り着きます、し

たがって天獄にいる者は全員自殺した事のある者です】

「これは…さっき天鬼が言ってた事だな」

これについては事前に詩織の自殺を知っていたので、俺の方は問題無い。

自殺した瞬間の記憶も持っているし。

「皆、これに間違いは無いか？」

誹泉の言葉に異論を唱える者も出てこない。

つまり…本当に、ここに居る全員が自殺者という事になるのだ。

その経緯はどうあれ、自分で自分を殺した者達の集まり。

…誰も言葉を発せず、大広間が重い空気に包まれる。

皆がその時、その瞬間の自殺する光景を思い出しているのか。

だが…俺は。

俺の自殺の理由は…得に無い。

何と無く…と言った所で理解出来る者等、誰もいやしないだろうが。

「……………」

…国崎や勅使河原、日景の事を頭のおかしい奴呼ばわりしたがそう

じゃない。

ここに居る皆が自殺という正気の沙汰じゃない経験を得てここに居るのだ。

今、この場に”まともな奴”なんて居ない。

…道理で、癖の強い個性的な奴ばっかな訳だと俺は心の中で自笑した。

ぐいぐいつ

「…ん？」

そんな俺の服を誰が引っ張っているので振り返って見ると詩織だった。

「ねえ…彼方、皆何の話してるの？」

…この天然クール娘はそれさえわかってなかったのか。

「ルールの確認だよ、お前も部屋を出る時に一つ言われただろ？」

俺はひそひそと説明してやる。

「…何、それ？」

だが、詩織の方はまだピンと来ていないようだ。

「何って…部屋を出る時にアナログテレビにあの天鬼ってのが映っ

て言ってたろ？」

更に説明を加えてやる、以前からコイツを知っているのだから別にいらつきはしない。

「……てた」

「……え？なんだった」

詩織が小さく呟いたその一言を俺は聞き取れなかった。

だからもう一度言うように詩織に聞き。

「テレビ……壊れてたの」

その一言に、固まった。

一 本 目【不信】（前書き）

【彼方メモ】

No. 1・宇佐 飯子 うさ いいこ

《大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのようで場を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームで呼ぶ、やめて【配布武器…?】》

No. 2・榊 昌弘 さかき まさひろ

《リストラされたサラリーマン、温厚な人【配布武器…?】》

No. 3・日向 日景 ひむかい ひかげ

《日向の母親、ミハシラ様という神様を崇める宗教団体を信じてる、宗教狂い【配布武器…?】》

No. 4・日向 日向 ひむかい ひなた

《母親に強制的に宗教に入れられ、神子にされた少女、自分で自分を傷付ける病気を持っている【配布武器…?】》

No. 5・大前田 友清 おおまえだ ともきよ

《太った男、オタク、コイツの言動の元ネタがわかってしまうのが悔しい【配布武器…?】》

No. 6・勅使河原 社 てしがはら やしろ

《前世が悪魔にて自身も強大な魔力を持つトンデモ残念系中二病美少女、喋ると魔力が溢れ出るので筆談、筆談なので俺は無視してる

【配布武器…?】》

No. 7・水茂 めぐみ みなも めぐみ

《男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる【配布武器…?】》

No. 8・深見 柩 ふかみ まさき

《男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれっきとした男…だよな？【配布武器…?】》

No. 9・織笠 未娘 おりかさ みこ

《冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、なのに俺はタメ口されてる【配布武器…?】》

No. 10・赤松 慶二 あかまつ けいじ

《ヤンキー、沸点がかなり低いのかキレやすい【配布武器…?】》

No. 11・国崎 瑞穂 くにさき みずほ

《言動が病んでる、脇差し、笹錦（命名、勅使河原）を常に持ち歩く【配布武器…脇差し】》

No. 12・誹泉 伸一 ひいずみ しんいち

《服の上からでもわかる鍛えられた身体、結構無口【配布武器…?】》

No. 13・遼 彼方 はるか かなた

《自分の所に何書けてんだ？とりあえずリストカットで自殺してここに来た【配布武器…ナイフ】》

No. 14・柏瀬 詩織 かしわせ しおり

《車椅子愛用な幼なじみ、テレビが壊れててルールがわからない【配布武器…?】》

【生存者数、残り14人】

一本目【不信】

「壊れてたって…、あのテレビがか？」

「私が起きた時には壊れてたけど…そんなに重要だったの？」

…頭が痛くなって来た。

よく漫画とかの吹き出しに出てくる表現の黒いモジャモジャを俺も出してしまっそうだ。

詩織がああ放送を聞いていないって事は詩織の持つルールはわからないという事だ。

「もしかして…普通は壊れて無かった…り？」

そう、まさに普通は壊れて無かったりするはずだ。

「…ん？ちょっと待て、それなら何で詩織は大広間に集まる事を知ってたんだ？」

「それは織笠さんに教えて貰ったからだけど…？」

織笠…か、そういえば織笠は真っ先にナンバーが全部でいくつあるかを確認しに出てNo. 14の詩織と会ったんだよね。

…だったら、詩織が目覚めます前にテレビを壊したって可能性も？と、考えてすぐにそのアホな考えを捨てた。

まずわざわざテレビを壊すメリットがわからない。

ルールも足りなくなるし、そもそも壊すなら詩織以外のも壊すだろうし。

…となりや。

あの天鬼って奴の仕込みか、これが一番しつくり来るし。

「ルールの確認の前に…ちょっと良いか？」

『はあい？何かな遙 彼方君、何か質問かな？』

俺が手を上げると天鬼はまるで生徒を指す教師のように返して来た。

フルネームな辺り、確実に馬鹿にしてんな…。

「詩織は部屋のテレビが壊れててルールをまだ見てない」

俺のその発言は必然ながら全員に動揺を与え、皆がざわついた。

「このままじゃルールは全て埋まらない、わかるだろ」

だから俺は天鬼に本来詩織が知るはずだったルールの発表を求め。

『ふーん、そうなんだ』

返って来た返事は…それだけだった。

「そうなんだって…、おい！詩織のテレビは壊れてたんだぞ？お前が用意したかは知らないが詩織の知るはずだったルールを伝えるのがスジだろう！！」

『遙 彼方君、君は一つ勘違いをしてるよ』

わざとらしい咳ばらいをし、一瞬の間を置いて。

『彼女のテレビは”壊れてた”んじゃないくて”壊された”、もちろん、僕はやってないけどね』

「なっ…！そんな事やって得する奴なんて俺達の中に居ないだろ！！」

『そんな事僕に言われても知らないよ、やった人に言うんだね』

「てめ——」

思わず拳を握りしめたがそれを天鬼に振るう訳にも行かず、唇を噛み締めた。

コイツを殴ってしまえばルールの禁止部分に触れる事になる。

『うけけけけッ！残念残念、言っとくけど僕は君達の行動には一切干渉しないよ、悪魔でもナビゲーターだからね、天鬼だけど…！』

悪魔と天鬼をかけたシャレのつもりか天鬼本人は自分で言って大爆笑していたが俺達にそんな余裕は無かった。

「…どうでしょうか？」

「どうするも何もわからないなら仕方ないでしょう…、とりあえず今はわかるルールを確認しましょう」

水茂がおどおどとしながら聞くと宇佐がそう答えた。

「ならば…二番目の私か、ええっと…確か」

「ちよっと待ちなさいよ!!」

榊さんが立ち上がり、自身が聞いたであろうルールを思いだそうとしている中、声を上げる人物が居た。

「…お母さん？」

日向が見上げるのは今まさに榊に待ったをかけた自分の母親である日景である。

「ええっと…日景さん？どうしたのかな？」

榊さんが戸惑ったように聞くが日景は榊さん等眼中に無いように一人を陰悪な顔で睨み付けている。

「あなたは席を外すべきよ、そうよ、それが良いわ」

「…え？あたし？」

…詩織だった、言われた本人である詩織はポカンとしているが。

「なっ…、あんたは何を言ってるんだ？」

さも当然のようにそう話す日景に俺は哑然となった。

「だってあなた、自分のルールを知らない、つまり情報交換が出来ないのでしょう？交換できる物も無いのに情報だけ聞こうなんて虫が良すぎない？」

日景はニコニコの能面が張り付いたような笑みを見せる。

「それは…詩織のせいじゃないだろ、テレビが壊…、れてたのが原因だ」

一瞬、弾みで”壊された”と言いそうになった口を必死につぐみ、軌道修正といく。

これを言ってしまうえば確実に争いの種になってしまうからだ。

「つーかよ、そもそも誰がテレビを壊したんだよ？あっ？」

だがそんな思いも虚しく、赤松がギョロリと俺達を見渡した。

ざわついた嫌な空気が広がっていく。

「そもそも…本当に彼女が起きた時にテレビは壊れてたのかしら？」

「…何が言いたいんだよ？」

…今だにニコニコとした顔を止めない日景にさすがにムカついてき

た。

「彼女がルールを知った後に自分でテレビを壊して、ルールを自分だけ独占した、そうは考えられないかしら？」

「…考えられるの？」

…俺に聞いてどうすんだよ、この天然娘。

しかしこの日向の母親、面倒臭い性格してやがる。

「だからって出てけは無いだろ、詩織が出て行かないなら？」

「彼女に私の知るルールは教えないわ」

…それじゃあどっちみち詩織は日景の知るルールはわからないじゃねえか。

…カチンと来た。

「…なら俺のルールはあんたには教えねえ」

「…彼方？」

「あ、あなた何言って…」

「悪いが俺達は幼なじみでな、情報を共有しようと思う」

幼なじみと言って何人が驚いた表情を見せた。

…そーいやまだ言ってなかったっけ？

まあ今はそれ所じゃ無いが。

「…いいわよ、でもね」

日景はニタァと笑うと首をグルリと動かし、自分の子供である日向を見た。

「この子のルールもあなた達はわからなくなるわよ」

「…え？」

さも当然のようにそう言った日景を日向は呆然と見つめた。

「ね…日向、日向はお母さんの言う事をちゃんと聞く良い子よね」

「で、でも…」

日向がチラリと俺達の方に視線をやった。

俺達の事を気遣い、心配しているのが良くわかった。

グイッ

だがその表情は次の瞬間、悲痛なものへと変わった。

「痛っ…」

日景が…日向の髪を掴み、無理矢理自分へと顔を向けさせた。

「日向、返事は？」

「あ…う、お母…さん」

「ちょっと！あなた…何してるのよ！！」

「…母親としての教育よ、口を挟まないで欲しいわね」

「なっ…」

宇佐の言葉にさえ、日景はしれっとそう答えやがった。

日景は今もまだ日向の髪を掴み、引き上げ、離さない。

『うけけけけッ！虐待だ虐待！ドメスティック、ヴァイオレンス
！！』

天鬼がそれに合わせたようにゲタゲタと笑い転げる。

状況は最悪だった。

ルールの情報交換なんて騒ぎじゃなく、誰もがその目的を忘れていた。

いや…ただ一人。

織笠 未娘は顔色一つ変えず、動き出した。

「…織笠？」

織笠はすぐに誹泉の所へ行き、何か耳元で囁く。

誹泉もそれに頷くと――。

ガァァアンツ

大広間のテーブルを激しく下から蹴っ飛ばした。

さすがにひっくり返る事は無かったが誰もがその行動に動きを止め、部屋は静まり返る。

「さて…と」

そんな部屋の中、織笠は顔色も声色も変える事なく。

「榊さん、次のルールを」

榊さんにそう伝えた。

「あなた…私の話しを「聞いてたわよ」」

織笠は日景の言葉に被せるようにし、答えた。

「…いい加減、無駄な討論は止めましょう」

織笠の言葉は現状に呆れた様子でもなく、ただ淡々としていた。

「…今詩織さんをこの大広間から外に出しても後から彼方が自分の

知ってる事を全部伝えるでしょ、逆でも同じ」

確かにそうだ、詩織がルールを知る事が出来なくても俺が後で伝えるだろうし日景の場合は日向が居る。

…無駄な討論ってのはわかっていたんだ。

「だったら早くルールを把握して、討論するならそれからでも遅くないでしょう、榊さん」

「あ…うん、そうだね」

二回目の呼びかけで榊さんも完全に我に返ったのか、頷くと自分の知るルールを伝えた。

【式・その際、自殺に使用した道具と身につけていた物が配布されます、道具の使用方法に関しては各自自由です。】

これは…、これが何を指しているのか、俺にはわかった。

ナイフでリストカットした俺に配布されたのはナイフ。

そしてタバコ。

…もっとわかりやすい例として脇差しを持ったままの国崎も居る。

つまり経緯は不明だが国崎は脇差しで”自分を刺した”のだ。

…ちょっと待て。

ゾクリとした冷たい予感が俺の頭を霞める。

ナイフで自殺したならナイフ。

なら例えばロープとかでの首吊りならロープなのだろうか？

だったら…拳銃自殺なんかだと？

拳銃…そのものが配布されたり、するのか？

一 本 目【性行為】（前書き）

【彼方メモ】

No. 1・宇佐 飯子うさ いいこ

《大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのよう場で
を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、
何故か俺をフルネームて呼ぶ、やめて【配布武器…?】》

No. 2・榊 昌弘さかき まさひろ

《リストラされたサラリーマン、温厚な人【配布武器…?】》

No. 3・日向 日景ひむかい ひかげ

《日向の母親、ミハシラ様という神様を崇める宗教団体を信じてる、
場を掻き乱しやがる【配布武器…?】》

No. 4・日向 日向ひむかい ひなた

《母親に強制的に宗教に入れられ、神子にされた少女、自分で自分
を傷付ける病気を持っている【配布武器…?】》

No. 5・大前田 友清おおまえだ ともきよ

《太った男、オタク、コイツの言動の元ネタがわかってしまうのが
悔しい【配布武器…?】》

No. 6・勅使河原 社てしがはら やしろ

《前世が悪魔にて自身も強大な魔力を持つトンデモ残念系中二病美
少女、喋ると魔力が溢れ出るので筆談、筆談なので俺は無視してる

【配布武器…?】》

No. 7・水茂 めぐみみなも めぐみ

《男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる【配布
武器…?】》

No. 8・深見 柩ふかみ まさき

《男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれっきとした男…だよな
?【配布武器…?】》

No. 9・織笠 未娘おりかさ みこ

《冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、淡々とした口調で話す【配布武器…?】》

No. 10・赤松 慶二 あかまつ けいじ

《ヤンキー、沸点がかなり低いのかキレやすい【配布武器…?】》

No. 11・国崎 瑞穂 くにさき みずほ

《言動が病んでる、脇差し、笹錦（命名、勅使河原）を常に持ち歩く【配布武器…脇差し】》

No. 12・誹泉 伸一 ひいずみ しんいち

《服の上からでもわかる鍛えられた身体、結構無口【配布武器…?】》

No. 13・遼 彼方 はるか かなた

《俺、世渡りのやり方としていろんな話題を身につけたので誰とでもある程度は話せる【配布武器…ナイフ】》

No. 14・柏瀬 詩織 かしわせ しおり

《車椅子愛用な幼なじみ、テレビが壊れててルールがわからない【配布武器…?】》

【生存者数、残り14人】

一本目【性行為】

「考え過ぎ…か？」

拳銃自殺なんて漫画や映画とかでは良く見るが現実ではそうあるものじゃない。

そもそも拳銃を入手してそれから自殺なんて回りくどいやり方は誰もしないだろう。

「これって…つまり」

「ここに居る全員に心当たりがあるだろうね」

「…そうね、ちょうどわかりやすい人も居る事だしね」

宇佐はそのわかりやすい人、である国崎を見つめた。

「…ふん、何か言いたそうね、蠅女」

「…何ですって」

「あなた、さっきからうるさいのよ、ぶんぶんぶんぶんとまるで蠅みたい」

国崎の言葉に勅使河原は【そうだそうだ】と書いた紙を出して頷いた。

「いの…」

「あゝ、もう、また話しが妙な方向になっちまうから落ち着け」

食いつこうとする宇佐の首根っこを掴んでやる。

「お前らもだ、挑発して場を掻き乱そうとするな」

「…ふん」

俺の言葉に国崎は不満そうに首を反らし、勅使河原は…何か書いてたが無視した。

「…あら？」

「あ？」

ふと国崎がグイッと身体を前にのめらせ、俺の顎を掴むと見つめ出した。

「あなた…」

「な、なんだよ…」

国崎にじっと見つめられ、逆に目のやり場に困ってしまう。

「あなたの眼、あなたのその眼球…、リョウ君に似てる、素敵」

うつとりとした口調でそう話す国崎にゾッと背筋に薄ら寒い物が走った。

なんつー嬉しくない誉め言葉だろうか…。

「つ、次、さっさと次のルール行こうぜ」

話しを変える為、話題を次へ次へと進める。

「…私ね」

次はN O . 3である日景だった、また文句を言うかと思ったが以外にもあっさりと日景はルールを告げる。

【参・この空間に昼や夜、つまり時間の概念はありません、だから共同生活は時間無制限です。】

「…共同生活？」

なんだ？また新しいキーワードが出てきたぞ。

『うけけのけっ！いやあようやく出てきたねえ』

天鬼が待ってましたと言わんばかりに高らかに人差し指を上へ向けた。

『そう！そうなんです、君達がここでもらう事はただ一つ、時間無制限の共同生活です』

共同生活…？それも時間無制限の？

「え…、でもこんな所、食べ物も無いよね」

：そういえば、この大広間のテーブルの上にも何も無い。

豪華な料理でも置かれていればそれなりに絵になるだろうがここにはキッチンも見当たらない。

『うけけけけっ！何言ってるんだい、君達はもう死んだんだよ、ここは死後の世界なんだよ』

天鬼はそんな動揺する俺達を嘲笑うと。

『じゃあ君、次のルールを発表しちゃおうか？』

天鬼は日向の方に向き、説明を促した。

「あ…、私のルールはその事についてでした」

日向がNo. 4、日景の後だとするなら二人は心中でもしたのだからか？

巫女…じゃなくて神子少女は立ち上がると自分のルールを告げる。

【氏・食事は必要ありません、飢えて倒れる事も、もちろん死ぬ事はありませんが睡眠は必要です、睡眠は各自、自分の部屋と独房以外では禁止です。】

「これは…」

食事関連の疑問は解決したが新しい謎が出てきた。

《独房》という仰々しいキーワードだ。

「寝るのは自分の部屋と独房という所だけ、って事はこの大広間も？」

『当然禁止だよ、あと他の人の部屋とかも当然ダメなのだあ!!』

天鬼がルールを補完するようにそう付け加えた。

「ここにも禁止ってあるね、破ったらどうなるんだろう」

成仏する。

：その答えは今の所俺だけが知っているがとりあえず、順番が来るまで様子見とする事にした。

まず成仏というのがなんなのかもわからない訳だし。

「次は僕かあ：、さっきもちよこつとだけ言っただけだね」

【呉・天鬼ちゃんはナビゲーター兼アイドルなので天鬼ちゃんへの攻撃行為は禁止です。】

これか：、天鬼の奴がどれだけ鬱陶しく挑発して来ても俺達は手出し出来ないって訳か。

「ナビゲーター兼アイドルって聞いてどんな萌えキャラかとw k t kだったんだけど、そんな事は無かったぜ」

がっかりと肩を落とす大前田、お前はまだそんな事を考える余裕があるのかとちよつと驚いた。

「ええつと…じゃあ次は」

宇佐が全員を見渡すが声を発する者は一人も居ない。

「……………」

かわりにピラッと一枚の紙切れを俺達に見せる無言の勅使河原が居た。

ちなみ中2病眼帯少女なコイツ、全然言葉を発しないがちゃんと居る事は居る。

それどころかきちんと自分の意見も述べてる、——紙に書いて。

ただ声に出した発言は嫌でも俺の耳に入ってくるが紙に書かれた文字は意図的にスルーできるのだ。

【月が深紅に染まる夜、駄天使ルシファーからの悪魔の果実が与えられる、その実を食すも食さないも自由である】

えつと…、うーんと？

なんぞこれ？

「日本語でおK？」

大前田の感想に俺も同意、とにかく意味がわからん。

「つゝか駄天使ってなんだ？漢字間違ってないか？」

俺がそう指摘すると勅使河原はハッと気付いたように一度紙を回収し、駄の部分ペンでぐちゃぐちゃと塗り潰す。

そしてうーん考えるように唸ると。

ピラッ

駄天使の部分が”だ天使”に修正された紙を再び見せてきた。

多分、堕天使と書きたかったが漢字がわからなかったんだろう。

「あの…、もっとわかりやすく書いて欲しいんだけど」

深見がそう告げると勅使河原は渋々と紙を戻し、新しい紙にサラサラとルールを書いた。

【録・時折天鬼ちゃんマジ天鬼からのプレゼントがあります、どう使うかは自由です。】

これは…中2っぽい言葉も無いし間違いないかな？

「プレゼント…ねえ、ちなみに何くれるのかとかは？」

『当然内緒だよ！僕はサプライズを大切にするからね』

…このルールに関しては今はこれ以上話しを広めそうは無いな。

「じゃあ次…、7番目のルールは？」

榊さんが周りを見渡しながらそう告げるが今度もすぐに声を発する者は居なかった。

なんだなんだ？ 勅使河原が二人居るのか？

「おいおい…、さっさとしろよ、部屋のナンバーが7の奴は？」

「あ、あの、その…、私…です」

赤松の威圧するような言葉に水茂が小さく押し殺したような声で答えた。

男性恐怖症の水茂だ、…どうにもやりにくい。

「んで、あんたのルールは？」

「あの…、その」

水茂の視線はキョロキョロとあちこちを行ったり来たり。

テンパっているのが一目でわかる。

…いや？ テンパってると言うより、なんだろう…、ルールを言いたくなさそうな雰囲気だ。

「水茂さん、その…ルールを」

宇佐がそう促すと水茂は意を決したようにコクつと頷くと。

「その…、私のルール…は、あの、セツ…、え…、えっちの…禁止、です」

そのまま顔を上げず、それでも顔が真っ赤になっているのがわかるような口調でそう答えた。

「…えっちの禁止？本当にそんな内容だったのか？」

「た…、正しくは、ふ、不純異性行為、つまり…せいこういは、二人の合意でも…、その、レイ…、お…襲うのも、どちらも禁止…です」

水茂は顔は真っ赤所か目はすでに涙目。

それでも恥ずかしさに耐えるように拳をギュッと握りしめ、そう言いきった。

羞恥に耐えながらの大勢の前でのそんな内容のルールの発表。

…これ何てプレイ？

「すいません、もう一度言いですか」

大前田が”キリッ”とした顔でそうアンコールを求めた。

マジ勇者だ。

「ううう…」

「異性間での性行為、つまりセックスの禁止、これは二人が合意でもレイプでも駄目って事」

言葉に詰まる水茂より先に織笠が男前にも恥じらう事なく淡々と答えた。

「…把握、恥じらいつて萌えポイントだと改めて知った」

大前田もこれ以上何も言えず、引き下がる。

…しかし、なんだこの7番目のルール。

1～6のルールが非現実的なものばかりだったせいかなおさらにその異質さが強まる。

そもそもわざわざルールとして禁止する理由がわからない。

こんな異常な状態で性行為しようなんて考える馬鹿は居ないだろう。

閉鎖された空間、集められた男女、性行為。

それ、なんて……。

「それ、なんてエロゲ？」

「AVの企画物じゃねえんだからよ」

赤松と大前田のほぼ同時の発言、俺の意見が大前田と一緒にだったのがちよつと切ない。

「ちなみに…理由とかあるのか？何で禁止みたいな」

『うけけけけっ！それはね…、エッチシーンがあると君達の物語りが18歳以下は見れなくなるからだよ！！』

「…は？」

『だって僕は永遠の17歳だしね、えっちなのはいけないと思います』

「……………」

なんだろうか、上手く話をそらされている気がする。

何か…このルールには裏がありそうな、妙な感覚。

「ちなみに…だけどさ、どこからが性行為とされるの？」

深見の言葉にそれもそうか、と思った。

いや、もともとやるつもりも無いけど、例えばキスや胸を揉むといった行為からNGなのだろうか？

『うーん、僕がキャーッ！恥ずかしい、見ちゃいらんない！！って思った所からかな』

つまり…基準はコイツな訳か。

こっちとしちゃ例えばラッキースケベとかで禁止に触れられればたまったもんじゃないが。

【七・不純異性行為、つまり性行為は両者の合意、レイプのどちらとも禁じます、合意の場合はどちらも、レイプの場合は加害者が処罰の対象です、性行為の基準は天鬼ちゃん基準です。】

「でもこれは良いかもね、女性側として安心できるし」

「はい…本当に、そう、思います」

宇佐が冗談混じりにそう言うとき水茂はコクコクと何度も頷いた。

「おいおい、自意識過剰なんじゃねえの？」

「一番危なそうなあんたに言われたくないんだけど」

皮肉するような赤松の言葉に宇佐も目をつり上げて答えた。

「悪いが俺はプライドの高そうな女の屈辱感に塗れた顔が好みなんだよ」

くっくくく、と続けて笑うとき赤松は国崎の方を見た。

「…やってみるがいいわ、ただし、あんたのその汚らしい物が食いちぎられて吐き捨てられる覚悟があるならね」

国崎はそう答えるとギロリと鋭い歯を覗かせる。

…あまり想像はしなくないが、想像した光景にあそこがキュツとなつた。

これはひどい。

「勉強になるぜ、てめえみたいな相手にすんなら相手の歯を全部引っこ抜いてからってな」

「うわ…鬼畜だ」

大前田がボソツと呟いた言葉。

「ねえ…、どういう意味？さつきから」

それを拾わねば良いものを拾ってしまうのが詩織である。

さて、なんと説明すればいいものか。

「えっとだな…、歯を全部抜くって事は」

国崎が人質をとれなくなる…？

…イマイチか。

「って、ちょっと！みんなしてさつきから何の話してるの！ここには日向ちゃんみたいな子供もいるのよ！！」

宇佐の言葉にハッと思い出した。

あまり日向のような子供に話す内容じゃないよな。

そう思い、バツが悪そうに日向と日景の親子の方を見ると案の定日向は顔を下に向け、表情は見えない。

まあ、当然か、と考え次のルールへ向かおうとして、日景と目があった。

「……？」

日景の口元が薄く、微笑んだ。

なんだ…、今、笑った…のか？

俺がその疑問の答えを出そうと考えようとするが。

「よし、じゃあ次のルールいこうか」

それより先に、ルールの交換は次へと進んでしまった。

頭に残る違和感を捨てないままに。

一 本 目【成 仏】（前 書 き）

【彼方メモ】

No. 1・宇佐 うさ いいこ 飯子

《大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのよう
で場を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無い
っぽい、何故か俺をフルネームで呼ぶ、やめて【配布武器…？】
》

No. 2・榊 さかき まさひろ 昌弘

《リストラされたサラリーマン、温厚な人【配布武器…？】
》

No. 3・日向 ひむかい ひかげ 日景

《日向の母親、ミハシラ様という神様を崇める宗教団体を
信じてる、場を掻き乱しやがる【配布武器…？】
》

No. 4・日向 ひむかい ひなた 日向

《母親に強制的に宗教に入れられ、神子にされた少女、自
分で自分を傷付ける病気を持っている【配布武器…？】
》

No. 5・大前田 おおまえだ ともきよ 友清

《太った男、オタク、コイツの言動の元ネタがわかって
しまうのが悔しい【配布武器…？】
》

No. 6・勅使河原 てしがはら やしろ 社

《前世が悪魔にて自身も強大な魔力を持つトンデモ残念系
中二病美少女、喋ると魔力が溢れ出るので筆談、筆談な
ので俺は無視してる

【配布武器…？】 》

No. 7・水茂 みなも めぐみ

《男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えら
れる【配布武器…？】
》

No. 8・深見 ふかみ まさき 柩

《男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれっきとした
男…だよな？【配布武器…？】
》

No. 9・織笠 おりかさ みこ 未娘

《冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、淡々とした口調で話す【配布武器…？】》

No. 10・赤松 慶二 あかまつ けいじ

《ヤンキー、沸点がかなり低いのかキレやすい【配布武器…？】》

No. 11・国崎 瑞穂 くにさき みずほ

《言動が病んでる、脇差し、笹錦（命名、勅使河原）を常に持ち歩く【配布武器…脇差し】》

No. 12・誹泉 伸一 ひいずみ しんいち

《服の上からでもわかる鍛えられた身体、結構無口【配布武器…？】》

No. 13・遼 彼方 はるか かなた

《俺、世渡りのやり方としていろんな話題を身につけたので誰とでもある程度は話せる【配布武器…ナイフ】》

No. 14・柏瀬 詩織 かしわせ しおり

《車椅子愛用な幼なじみ、テレビが壊れててルールがわからない【配布武器…？】》

【生存者数、残り14人】

一本目【成仏】

「じゃあ次は…8のナンバーの人」

俺の違和感とか関係無く、ルール交換は続いていく。

ルールを聞き逃す訳にはいかないので今は集中するしか無いか…。

「あ、僕だよ」

手を上げたのは深見だった。

「実はさっき日向ちゃんが言ってた独房なんだけど、僕のルールはそれなんだ」

【※・独房の使用は自由ですが鍵は共通の物として必ず指定の場所に戻して下さい、個人による管理は禁止します。】

「独房…、何に使うんだろうね」

「…普通に考えるなら、閉じ込める、つまり監禁する為だろうな」

「そんな物、必要なのかなあ…」

榊さんと誹泉の会話に深見がぼやくように呟いた。

「必要だからここにあるんじゃないの、いや…必要になるから、か」

「…どういう意味？」

「それは俺のルールを知ればすぐに理解するさ、嫌でもな」

赤松は薄く笑うとそれ以上何も言わなかった。

「…独房の鍵ってのは？」

「たぶんアレね」

織笠の視線の先、壁に杭が打たれてそこに鍵がぶら下がっている。

「鍵は使ったらあそこに戻し、個人での管理は禁止ってあるけど…、どこまでが管理になるの？」

『んー、そうだねえ、自分の部屋に持ってっちゃうのはNGかな』

深見の問いに天鬼が答える。

「独房…、でも、使う事は無い…はずよね」

宇佐の言葉に誰も頷かないまま、ルール交換は次へと進んだ。

「…次は私ね」

【Q・この空間を調べる事は自由ですが決められた立入禁止の場所に入るのは禁止です。】

織笠が自分のルールを告げる。

「…これね」

「調べる事は自由…、って事は探せば脱出口とかあるのかなあ」

「おい、そこら辺どうなんだ？」

『さあねえ、っていうかあっても教える訳ないじゃん』

…そりゃそうか。

「ルールにある立ち入り禁止の場所ってのは？」

『うん、それはもちろん教えるよ、まず天国への道と地獄への道』

「…は、あるのか？そんなもん」

『もちろんだよ、だってここは天国でもなければ地獄でもない、天獄なのだから』

…まあ、立ち入り禁止とされてるならあってもなくても意味は無い
か？

『それと大浴場は異性の脱衣所、大浴場への侵入は禁止だよ、破廉恥だから』

「…え？お風呂、あるんですか？」

『もっちゃろんだよ、この共同生活において”必要になる”からね』

これには少し驚いた…。

この訳のわからない空間にもきちんとお風呂があるらしい。

男が女湯に、女が男湯に入る、つまり覗きは禁止らしいが…、まあやらないし。

「大浴場についてクワシク」

『うーん…、詳しい説明は大浴場ですよ、主婦必見の機能もあるからね』

謎の言葉を残し、天鬼は大浴場の説明を打ち切った。

「良かった…お風呂があるんだ」

宇佐が嬉しそうに微笑んだ。

というか宇佐だけじゃなくて女性陣にとっては風呂はかなり重要なのだろう、皆嬉しそうだ。

「デカイ風呂だったら…泳げるかなあ」

…俺の幼なじみはちよつとベクトルが違う方向に嬉しそうだ。

というか詩織の足じゃ泳ぐ所か浴槽へ行くにも一苦労だろうが。

「あゝあ、マジで全員状況分かってねえなあ」

…この和やかなムードをぶち壊したのは赤松だった。

「…どういう意味？」

「悪い悪い、空気読めなくてよ、まあ俺のルールを知りや嫌でもわかるぜ」

赤松は勿体振るようにニヤつくと自分の知るルールを告げた。

【獣・共同生活の中で殺された場合、それは成仏扱いとなります。】

「…え？」

「なん…だ？これ？」

先程の和やかな空気がいかに偽物だったのかわかるように。

その場の空気は一瞬で凍り付いた。

「共同生活で”殺された”奴は成仏扱い、だよ」

…成仏の意味がわかった。

これは…死に変わる新たな終わりの言葉だ。

あえて成仏と言葉を変えるのは一度死んだ俺達に対する最大の皮肉。

「さあって、問題です、何でこのルールは”死んだら成仏”じゃな

くてわざわざ”殺されたら成仏”なのでしょうか？」

赤松は楽しげに、本当にクイズをするような口調で更に続けた。

水茂や深見、日向なんかはそんな赤松の態度に今にも泣きそうな顔だ。

「ヒントその一、俺達が配布された自殺に使った道具は何に使うのでしょうか？」

誰も答えない事を確認すると赤松は更に言葉を続けた。

…俺達は飢えて死ぬ事はない。

だからこそ…”殺されたら”。

そして…その為の道具。

「…おい、クソ天鬼」

『どうしたのかな、遙 彼方君、怖い顔しちゃって』

天鬼のおちやらけた態度は俺の神経を更に逆なでした。

「お前…、俺達がここに居る目的は共同生活って言ったよな？」

『そうだよ、君達にして貰うのは時間無制限の共同生活さ』

「だったらこのルールは何だよ!!」

気が付けば声を大きく張り、怒鳴っていた。

『だってさあ、ほら、事故って…あるじゃない？』

「…事故？」

『そう、事故、誤って転んじやってたまたま持っていたナイフが運悪くそこに居合わせた他の誰かさんの脳天に偶然突き刺さるようなさ』

淡々と、恐ろしく、天鬼は言葉を続け。

『そういう”不幸”な事故って…あるじゃない？』

最後はニヤリと口元に笑みを浮かべ、そう括りやがった。

「ふざけんな…、てめえが言ってるのは俺達に殺し合——」

「彼方」

天鬼に詰め寄ろうとする俺を止めたのは織笠だった。

「っ…」

わかっていた。

それを口に出してしまえばもうどうしようもなくなる事を。

「で、でも…さ、人を殺す、なんて誰もしないよね？」

「…そうね、そんな事しても誰も得しないわ」

深見のすぎるような言葉に宇佐が当然のように答えた。

「あっはははははははは！まだそんな事言ってるの？蠅女」

国崎は二人の会話を聞くとけらけらと笑い出した。

「…何よ？」

「ここにはね…、あるの、人を殺す事で得られる最高の物」

国崎はそのまま愛おしそうに自分の持つ脇差しを抱きしめる。

「次は私のルールね…、ちょうど良いわ、教えてあげる」

【銃市・全員成仏し、最後の一人となった者は願い事を一つ叶えた上で生き返る事が出来ます。】

「ん…な？」

なんだよ…これ。

自分以外の全員が死ねば…願い事を一つ叶えた上での生き返り？

『うけけけけッ！誤解される前に言っておくけどさ、一人になっちゃったら共同生活は出来なくなるから解散って意味だよ、願い事はお礼みたいなものさ』

コイツ：あくまでも共同生活と言い張るつもりか？

「願い事を一つ…、間違いないのよね？」

国崎は脅迫めいた執念の籠った目で天鬼を睨みつけた。

『ルールは絶対だよ、それは君のルールでわかるはずさ、ついでに発表しちやいなよ』

天鬼は誹泉の方を向いてそのルールの発表を求めた。

「…なるほどな、最初からそれが狙いか」

【12・共同生活をする上でルールは絶対でありマス。。】

誹泉に与えられたルール。

ルールはこの共同生活における絶対の鉄則。

『だからルールの通り、最後の一人になっちゃった人は全知全能たる神様が願い事を叶えて生き返らせてあげます!!』

その中でも今回、国崎が発表したルールは簡単にいえば報酬なのだ。
人を殺して得になる為の報酬。

『お金はもちろんとしてあのいじめっ子をぶち殺せるパワーも当然、死んじゃってもう二度と会えない大好きだったあの娘との再会やモテモテハーレム生活、あと…”動かなくなった足を動けるよう”に

したり？
』

ビクッと詩織の肩が震える。

「……………」

俺がそんな詩織に出来る事は…何一つ無かった。

いや…、出来る事じゃない、これはやっちゃいけない事なのだ。

「リョウ君に会えるんだ…、ふふふ…待っててね、すぐだから」

国崎はまたぶつぶつと独り言を呟きながら自分の世界へと入っていく。

…最悪だ。

例えば誰かにいじめられて自殺した奴がこの中に居るなら。

そいつはいじめられた奴らに仕返し出来るような願いを叶える為に誰かを殺すかもしれない。

それは俺以外の誰もが思っている事だろうか…、皆を見渡している中、何人とも目があった。

「彼方、最後のルールを」

コイツ…織笠はこんな状況の中、目が合うなりそう言葉を発した。

14番目のナンバーである詩織のルールがわからない以上、13番

目である俺のルールが最後だ。

「お前…なんでそんな冷静なんだよ？」

「…言っただけよ、討論は今わかるルールが全部わかってからだっ
て」

「…わかってるよ」

俺は自分の知る、最後のルールを皆に告げた。

【十三・上記のルールにある禁止部分を犯した人には成仏して貰います、ですが禁止部分に触れなければ何をしても自由です。】

何をしても自由。

この共同生活では禁止部分に触れなければ何をしても許される。

もし…ルールの中に人に危害を加えるのは禁止、とかがあればなんとも嬉しいルールになるが。

…人殺し、ここでの言葉なら成仏が、ここでは自由なのだ。

「さて…、詩織さんのルールはわからないし、ルール交換はこれで
終わりね」

織笠が話を淡々とした口調のまま、議題を”次”へと進める。

「重要なのは…今後どうするか、よ」

…今後、つまりこれから始まる俺達の共同生活。

最悪の出来事が起きないように…、何かを考えなければならないのだ。

一 本 目【惨劇回避への霧散】（前書き）

【彼方メモ】

No. 1・宇佐 飯子うさ いいこ

《大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのよう場で仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームて呼ぶ、やめて【配布武器…?】》

No. 2・榊 昌弘さかき まさひろ

《リストラされたサラリーマン、温厚な人【配布武器…?】》

No. 3・日向 日景ひむかい ひかげ

《日向の母親、ミハシラ様という神様を崇める宗教団体を信じてる、場を掻き乱しやがる【配布武器…?】》

No. 4・日向 日向ひむかい ひなた

《母親に強制的に宗教に入れられ、神子にされた少女、自分で自分を傷付ける病気を持っている【配布武器…?】》

No. 5・大前田 友清おおまえだ ともきよ

《太った男、オタク、コイツの言動の元ネタがわかってしまうのが

悔しい【配布武器…?】》

No. 6・勅使河原 社てしがはら やしろ

《前世が悪魔にて自身も強大な魔力を持つトンデモ残念系中二病美少女、喋ると魔力が溢れ出るので筆談、筆談なので俺は無視してる

【配布武器…?】》

No. 7・水茂 めぐみみなも

《男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる【配布武器…?】》

No. 8・深見 柩ふかみ まさき

《男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれっきとした男…だよな？【配布武器…?】》

No. 9・織笠 未娘おりかさ みこ

《冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、淡々とした口調で話す【配布武器…?】》

No. 10・赤松 慶二 あかまつ けいじ

《ヤンキー、沸点がかなり低いのかキレやすい【配布武器…?】》

No. 11・国崎 瑞穂 くにさき みずほ

《新ジャンル、病む対象の居ないヤンデレ、【配布武器…脇差し】》

No. 12・誹泉 伸一 ひいずみ しんいち

《服の上からでもわかる鍛えられた身体、結構無口【配布武器…?】》

》

No. 13・遼 彼方 はるか かなた

《俺、世渡りのやり方としていろんな話題を身につけたので誰とでもある程度は話せる【配布武器…ナイフ】》

No. 14・柏瀬 詩織 かしわせ しおり

《車椅子愛用なクール天然幼なじみ、テレビが壊れててルールがわからない【配布武器…?】》

【生存者数、残り14人】

一本目【惨劇回避への霧散】

「…これから？あなたは何を言っているの？」

織笠の言葉に日景があからさまに眉を吊り上げた。

「私達はどこかの誰かがルールを知らないおかげで一つ、ルールが無いのよ」

コイツ…、まだ詩織の事を根に持ってやがったのか。

「それがもし禁止に関わるものだったら…、私達は知らない間にルールに違反して成仏してしまうかもしれないでしょ」

…悔しいが日景の言ってる事は正論だ。

思いもよらない事がルールにあり、そのルールに違反して成仏…がこのままじゃ起こりえる。

「それについては問題無いわ」

だが織笠はそんな俺や日景の疑問に涼しい顔で答えを返してくれた。

「彼方のルールは覚えているでしょう？」

【十三・上記のルールにある禁止部分を犯した人には成仏して貰います、ですが禁止部分に触れなければ何をしても自由です。】

そう、これが俺の話したルールだ。

「これが何よ？」

「この上記というのはルールの1と12の事を示している、つまり14番目である詩織さんのルールは該当しない…、でしょ？ 日景さん」

…なるほど、確かに。

「つぐ…、良いでしょう」

織笠の冷静な言葉に日景もこれ以上追及出来ないのか、大人しく引き下がった。

「それじゃあ…改めて、これからどうするか決めましょうか」

織笠が何事も無かったかのように皆に進言する。

「…決まってるわ、お互いを信用しあい、協力しあうべきよ」

「おいおい…、正気かよ」

間髪入れずにそう答えた宇佐に赤松が呆れたような声を出す。

「お互い見知らぬ奴ら同士が集まっていきなし殺し合い有りの共同生活やろうって話しなんだぜ、協力しあえる訳ねえだろ」

「しかし殺し合いは強制じゃない…、皆が協力しあえば何も起きないんじゃないか？」

宇佐と榊さんの提案する協力しよう作戦は二人にとってとても”ら

しい”提案に思えた。

「はっ…、なんつか、テンプレ通りの台詞だよな、だったら聞くが肝心のあんたらはここに居る全員を信用できるのか？」

「そ、それは…」

…出来ないよな、やっぱ。

少なくとも俺には無理だ、得に国崎と日景が怪し過ぎる。

「見知らぬ、しかも全員が何かしら人の殺せる道具を持ってる状況だ、そりゃあっさりと人を信じられねえよ」

「…人を殺せる道具、武器」

詩織がハッと思いついたように声に出した。

「武器よさらば…、とか？」

「そ、それよ!!」

詩織の発した言葉を助け舟のように感じたのか、宇佐が拾う。

「武装放棄、これで争いの種は無くなるわ!!」

これだ!とでも言わんばかりの笑顔だった。

「確かに…武器が無くなればちよっとは安心できるかも」

深見も宇佐に同意する。

「正気なの？　あなた達」

今度は国崎がギロツと睨みつけながら話す。

「自分を守る物を自分から手放すなんて…、お花畑も大概にしなさい」

「だからその為にも皆で一切に武器を捨てようって言ってるのよ」

「…良いこと教えてあげる、蠅女、人を殺すのに道具なんて必要ないのよ」

国崎は不敵に微笑むとトントンと自分の首を指差した。

「指先で頸動脈を探りあげ、押しつぶす、それだけで人は呼吸すらままならなくなる、意識が落ちれば後は簡単…」

道具等無くても、人は簡単に人を殺せる。

「例えばそのでかぶつが襲って来たら…、抵抗できる道具も無いとただされるがままよ」

でかぶつ…と俺達の中でも一際体格の良い誹泉を見て国崎は言った。

…確かに、誹泉と素手で喧嘩しても勝てないだろう。

「いや、そのでかぶつに限らず男と女じゃ力の差は明らかよ」

「で、でも…」

「宇佐さん…」

反論しようとした宇佐を止めたのは水茂だった。

「私…私は、武器は…あった方が良い…です」

水茂は男性恐怖症だ。

先程の国崎の言葉が水茂のこの発言を促していた。

「プラスに考えるなら…武器は相手をどうこうする物じゃなく、最低限の自分の身を守る物、そう考えるべきじゃないかな？」

榊さんの言葉に宇佐も納得はしていないようだがそれ以上何も言わなかった。

「誰かを襲っちゃダメって決まりを作る…とか？」

「そんな決まり作ってもな…、皆が守るかどうかわからないだろ」

「あ、あの…私、皆で信じ合って悪い作戦でも無いと思うんです、学校の先生もそう言ってました」

日向が子供ながらにそう発言した。

「確かに、全員を信じないギシアンルートはバッドエンド濃厚だし

ね」

「彼方、ギシアンって？」

大前田独特の話し方に詩織が首を傾げた。

「疑心暗鬼の略って事だよ」

「ああ…なるほど」

うんうんと納得したように頷く詩織。

「それで、疑心暗鬼って？」

…何年も幼なじみやってたからこの返答には予想がついたがあえて言おう。

そっからかよ！！

「疑心暗鬼ってのは…、何でも無い事でも変に深読みしたり疑った
りで、誰も信じれなくなるって事だよ」

手元に百科辞典とかも無いので、何となくの俺の疑心暗鬼象を話しておいた。

「全員が全員を信用しないってさ、それはそれで悲惨な結末しか無い
と思うぜ」

だから俺は皆にそう告げた、それはもちろん、逆も同じ事が言える。

「もちろん、全員が全員を無条件に信じ合うのみな」

「つまり、他人は信用するな、ただし他人を疑うな、矛盾してますがそうおっしゃりたいんですね？」

「ああ…そうだよ」

日景の丁寧な口調に不気味さを感じながらも頷く。

「ふふふ…、まああなた達には丁度良いんじゃないんですか？」

「…お母さん？」

日向が自分の母親を見上げる。

「ここに居るのは全員自殺した者、つまり社会からはみ出た負け犬、敗北者、信頼関係第一の人間関係なんてあなた達の最も苦手とする分野じゃない？」

これに対し、俺は何も答えられなかった。

会社での人間関係は悪く無かったし友達だって居る。

だが周りの皆の顔色を見ると異端なのは俺の方だというのはすぐにわかった。

「そんなあなた達にはこの上辺だけの仲間ごっこはお似合いですわ」

「…おまいが言うな、とツツコミ待ちですか？」

まあ、ここに居るといふ事は日景だって立場は同じのはずなのだ。

「私は違います…、私は誰も信じませんから、私が信じるのは…、そう、ミハシラ様だけ」

ハッと気付いたように日景は立ち上がるとズコズコと部屋から出ていこうとした。

「ち、ちよつとあなた！どこに行くの！！」

「ミハシラ様にお祈りを捧げに部屋に戻ります、それに…汚れた魂達がいっせ襲って来るかもわかりませんですしね」

慌てて止めようとする宇佐を汚らしい物を見るように一瞥する。

「話しはまだ終わって無いわよ！！」

「…日向」

日景がぐると首だけを動かして日向の方へと向けた。

「は…はい」

「後で、何があったか…報告なさい、良いわね？」

日向が二度コクコクと頷くのを確認すると日景は満足そうに笑い、出ていってしまった。

「殺人犯が居るかもしれないのに一緒になんて居られるか！俺は部屋に戻る！！」

「…全く笑えないし不謹慎だから止めとけ」

…俺も今まさにそう思っただけなのに、とりあえず大前田に釘をさしておいた。

テンプレ通りの死亡フラグだが…、これで日景に何かあれば本当に笑えない。

「私、連れ戻しに！！」

「止めとけよ、戻って来たってまた話しがこじれるだけだ」

日景を追う為に慌てて部屋を出ていこうとした宇佐を赤松が鬱陶しそうに止めた。

「でも…一人で行動させちゃ危険じゃない」

「あのババア以外は全員この部屋に居るんだ、心配ねえよ、逆にあんたが出てった方が怖いね、追い掛けて殺すとかよ」

「私はそんな事しない…」

「…どうだかな」

「赤松、お前はさっきから殺人前提で話してるが、それは何故だ？」
今まで沈黙が続いていた誹泉が赤松に目を向けた。

「あん？何故だど？そんなもん…、決まってるだろ」

意外な事を聞かれた…、といった具合に赤松は不愉快そうな表情をみせる。

「ルールにあんだろ、殺し合って最後の一人になりゃ願い事を叶えての生き返りだぜ？」

「…前提を忘れたか？俺達は元々、全員が自殺している、つまり…一度生きるのを諦めた身だ」

誹泉の言いたい事は自殺の理由が無い俺にも説得力は無いがわかる。自殺をする状況というのは普通、それほど追い込まれた状況のはずだ。

生きているくらいなら死んだ方がマシ…というくらいの。

「そんな俺達がいくら願いが叶うと言っても…、人を殺してまで生き返りたいと…そう願える場所なのか？あそこは」

「……………」

皆が押し黙った。

「…僕はやだな、誰も殺したくなんてないよ」

「…そうね、私もゴメンだわ」

…やはり、トラウマがあるか。

俺は…どうなんだろうか？

もちろん、誰かを殺してやろうとは思わないが。

「じゃあお前らはこの共同生活を受け入れるってのか？」

「…受け入れる訳じゃないわ、もちろん抗うわよ」

赤松の言葉に宇佐がそう答える。

「ただ皆で協力してここから脱出、それがベストじゃない」

「協力ねえ…、具体的にどうすんのさ」

「やっぱ常に皆で一緒に居るのが最適じゃね？一人で行動は死亡フラグだろ常考」

「…お母さん」

大前田の言葉に一人で部屋を出て行った母親を思い出したのか、日向が暗い顔をした。

「一人で行動してりゃ危険だし何かあった時疑われやすい、メリットしかない訳だ」

なるほど、集団の中にいれば何かあった時、それがアリバイになる。

「ちょっと待てよ、忘れたか？ルール上、どうしても別行動になっちまう時があるぜ」

「…睡眠ね、ご飯は食べなくて良いのに睡眠は必要なんで変な感じだけど」

おそらく…、それを見通してのルールなのだろう。

睡眠は自分の部屋と独房意外は禁止されている。

睡眠をとるならば嫌でも集団から外れる必要がある訳か？

「確かに変な感じ…、普通はお腹いっぱいご飯を食べて眠くなるのに」

…詩織の言ってる事はちよつと違う。

「そういえば…鍵、無かったな、部屋の」

「えっ…、じゃあ寝てる間に誰が入ってもわからない…って事？」

誹泉の言葉に深見が顔を青ざめる。

「そこん所の問題、どうするよ？」

赤松が周囲を見渡すが誰の返事も無い。

「あ…あの」

いや、一人、手を上げたのは日向だった。

「私達で決めたらどうでしょう？寝る時は皆一斉に、とか、お昼寝の時間みたいに」

…なるほど、確かに子供らしい発想だが悪くない。

全員が寝る為に一斉に部屋に入ってしまったば——。

「自分が寝ているのに誰かが動き回っているって恐怖はなくなる…かも」

もちろん、全員がその決まりを守る事が前提だが。

「付け加えるなら睡眠時間…、というより外出禁止時間か？皆で一斉に部屋に入り、時間が来るまで誰も部屋から出ない」

「でもルールにここには時間の概念は無いって…、時計もこんなのだし」

「…リレー方式とかどう？」

「リレー方式？」

「織笠殿、解説よろ」

織笠の提案に皆が注目した。

「そう、例えばナンバーの通りに行くならN O . 1の宇佐さんが榊さんを、榊さんが日景さんをと順々に起こしに行く」

「ああ、なるほど、それなら最終的に全員が起きれるって訳か」

これには誰も異論は無い。

「あの：ナンバー通りはちよつと」

と思ったら水茂が申し訳なさそうに手を上げた。

そーいや水茂の次は深見だったか。

見た目には男にも女にも見える中性的な顔立ちの深見でも水茂にと
つちややはり駄目らしい。

：男性索敵レーダーでも積んでるんじゃないか？

「そこは別にナンバーにこだわる必要は無いわ、これはルールの条
件じゃなくて私達で作った決まりなんだし」

宇佐の言葉に水茂はホッと安心したように肩を下ろした。

「それで、決まりを破った奴はどうすんだ、これは結構重要だぜ」

ここでの決まりを破る行為というのは外出禁止時間に自由に歩き回
る者の事だ。

赤松の言う通り、ここら辺の罰は必要だろう。

「他の全員でよってたかって一斉攻撃して殺すとかか？」

「まさか！誰にも襲われない為の決まりなのにそれじゃ本末転倒も良いとこだわ」

「だったらどうすんだよ？中途半端な罰だったら誰も守らないぜ？」

赤松の言う事は最もだが…さすがに殺すってのはやり過ぎだ。

…落とし所は何処だろうか？

「…独房」

パツとその答えがすぐに思いついてしまった。

いや…、考えてみればすぐにわかる事だった。

独房とはその為に用意されたものなのだ。

共同生活の中であぶれた者を閉じ込める為の独房。

「決まりを破ったら独房行きか、まっ…妥当かな」

これで天獄のルールに俺達の決まりを三つ追加した。

【睡眠は話し合いにより、全員で行う、睡眠時間は外出禁止として部屋から出てはならない、目が覚めた者から順々に次の者を起こしていく】

【共同生活において他人に危害を加えてはならない】

【決まりを破った者は独房へ拘束される事になる】

…天獄ルールっぽくするとこんな感じか？

これは天獄ルールと違って俺達で勝手に作った決まりだ。

つまり…バレなければそれまでの脆弱な掟。

「……………」

こんなもの、ただの気休めにしかないかもしれない。

天鬼の言葉通りなら俺達の中には詩織のテレビを壊し、ルールをわからなくした人物がすでに居るのだから。

「それじゃ、大浴場と独房を見に言ってみるか」

それでも俺達は皆がこの決まりを守る事を信じなければならない。

今はまだ…。

一 本 目【惨劇回避への霧散】（後書き）

時代の流れに乗っかるべくスマートフォンを購入を検討中だったり、仕事やばかったりで。

もしかしたら次回の更新は遅れるかもしれませんが、ご了承を。

一 本 目【独房と大浴場】（前書き）

【彼方メモ】

No. 1・宇佐 飯子うさ いいこ

《大学生くらいの女、なんか口やかましい委員長キャラのようで場を仕切ろうとしてるがリーダーシップは多分、あんま無いっぽい、何故か俺をフルネームで呼ぶ、やめて【配布武器…?】》

No. 2・榊 昌弘さかき まさひろ

《リストラされたサラリーマン、温厚な人【配布武器…?】》

No. 3・日向 日景ひむかい ひかげ

《殺人犯が居るかもしれないのに一緒になんて居られるか！俺は部屋へ戻る！！を素でやった人【配布武器…?】》

No. 4・日向 日南ひむかい ひなた

《母親に強制的に宗教に入れられ、神子にされた少女、自分で自分を傷付ける病気を持っている【配布武器…?】》

No. 5・大前田 友清おおまえだ ともきよ

《太った男、オタク、コイツの言動の元ネタがわかってしまうのが

悔しい【配布武器…?】》

No. 6・勅使河原 社てしがはら やしろ

《前世が悪魔にて自身も強大な魔力を持つトンデモ残念系中二病美少女、喋ると魔力が溢れ出るので筆談、筆談なので俺は無視してる

【配布武器…?】》

No. 7・水茂 めぐみみなも めぐみ

《男性恐怖症の大学生、声をかけても近付いても怯えられる【配布武器…?】》

No. 8・深見 柩ふかみ まさき

《男にも女にも見える中立的な顔立ちだがれっきとした男…だよな？【配布武器…?】》

No. 9・織笠 未娘おりかさ みこ

《冷静でクールな印象を見せる、詩織と同じ歳くらいの高校生、淡々とした口調で話す【配布武器…?】》

No. 10・赤松 慶二 あかまつ けいじ

《ヤンキー、沸点がかなり低いのかキレやすい【配布武器…?】》

No. 11・国崎 瑞穂 くにさき みずほ

《新ジャンル、デレる対象の居ないヤンデレ【配布武器…脇差し】》

No. 12・誹泉 伸一 ひいずみ しんいち

《服の上からでもわかる鍛えられた身体、結構無口【配布武器…?】》

No. 13・遼 彼方 はるか かなた

《俺、世渡りのやり方としていろんな話題を身につけたので誰とでもある程度は話せる【配布武器…ナイフ】》

No. 14・柏瀬 詩織 かしわせ しおり

《車椅子愛用なクール天然幼なじみ、テレビが壊れててルールがわからない【配布武器…?】》

【生存者数、残り14人】

一本目【独房と大浴場】

「…ここかな？」

【独房】と書かれたプレート扉を見つける。

この建物、どうやらさっきの大広間を中心としてぐるりと各1～14のナンバーの部屋が並んでいる。

その中で独房はナンバー1とナンバー14の間にあった。

ガチャガチャツ

「あー…やっぱり鍵がかかってるね」

扉は強固な物でびっちりと密閉され、隙間一つ無い。

榊さんがドアノブを回そうとするが鍵が掛かっているので開こうとしない。

「宇佐さん、鍵を」

「はい、どうぞ」

ガチャリッ

予め大広間から持って来て置いた鍵を使って独房の扉を開けた。

「これは…」

「得に何も無いんだね…」

深見の感想は恐らく、ここに居る全員の感想だろう。

独房の部屋は俺達の居た部屋より少し広いくらいで、得に何も無い。

「内側から鍵をどうにか…ってのは無理そうだな」

内側のドアにはドアノブさえついていなかった。

つまり外側から鍵をかけてしまえば内側からは開けようが無いのだ。

この何も無いシンプルな内装もプラスされ、この部屋は正に人を閉じ込めるだけにある部屋…といった所か？

「得にこれ以上見る事もなさそうね…」

宇佐の言葉に誰も反論が出なかったので俺達はまた通過を渡って今度は大浴場へと向かう。

風呂については興味があつた、この共同生活が本当に無期限なら重宝するだろう。

「…あ」

通過を進んだ日向がふと立ち止まった。

「どうしたの？日向ちゃん」

「あ、あの…その」

日向はもじもじと言いずらそうにチラチラと一つの部屋を見ていた。

「…ん」

釣られて俺達もその部屋を見れば日景の部屋だ。

「…日景さんの部屋だね」

そういえば日景はあのあと素直に部屋に戻ってミハシラ様とか何とかにお祈りをしてるのだろうか？

「お母さん…呼んで来ても良いですか？」

正直…あまり来て欲しく無いってのが本音だ。

なぜなら日景の存在は俺達の中でもかなり異質に思えるからだ。

いや…国崎もそうだが、先程の話し合いでわかった事だが国崎は恐らく、リヨウ君関係以外ならわりと正常な気がする。

話し合いにすら参加しなかった日景が一番の異質なのは間違いない。

「はあ？せっかく面倒な奴が自分から出てったってのにこっちからまた呼び出すのかよ」

だからまあ…赤松の言葉には概ね賛成だった。

「…ちょっとくらい我慢しようぜ」

だが…母親の事を心配する日向に罪は無いか。

「すみません！すぐに戻ります！！」

日向は深々と頭を下げて一礼し、扉を開けて日景の部屋へと入っていく。

その瞬間、呪文のようなものがぶつぶつと聞こえたが扉が閉まった事で掻き消された。

あれが”お祈り”とかって奴か？宗教はわからねえけど。

とりあえず…日向が日景を連れて来るまで待つしかないか。

「防音はしっかりしているな」

「…何が？」

珍しく誹泉が自分から語りかけて来たので俺も聞いてみる。

「…この扉だ、部屋の中の声がまったく聞こえなくなった」

ああ…そういえば、扉を閉めたら日景の呪文が聞こえなくなった。

…って事は逆もまたしかり、か。

中から外の音も聞こえないって訳か。

「…遅いわね」

「まったく、さっさとしろってんだよ！！」

日景の部屋から誰かが出てくる様子は無い。

日景と日向の関係については怪しい事が多い。

…心配になってきた。

「中に入ってみるか？」

俺がそう提案すると全員としても得に異論は無いのか反論は出てこない。

ガチャッ

ってな訳俺達は日景の部屋へと入った。

「あら…、人の部屋に勝手に入るなんて失礼じゃありませんか？」

そこに居たのはいつものように丁寧な口調の日景と

「げっほ…げぼっ！…みな…さん？」

脇腹をおさえて苦しそうに咳込む日向が居た。

「日向ちゃん！！」

慌てて宇佐が日向へと駆け寄った。

「日景さん…これは一体？」

榊さんも啞然とした表情で日景に問う。

「神聖なるミハシラ様の神子たる者がミハシラ様へ捧げるお祈りの邪魔をしたのです、当然でしょう？」

さも当たり前…といった口調で日景は榊さんにそう返した。

「そんな…それだけで自分の娘をここまで」

「あら…何か勘違いしていませんか？それはその子は自分でやったのよ」

…まただ。

日景の弁では日向は自分で自分を傷つける事があるらしい。

「私はただお祈りの邪魔をした事を叱ろうとしただけだったのよ、そうしたら日向がパニックを起こしてね」

だが…これは。

…日景は、自分の娘を虐待し、全てはそれを誤魔化す詭弁。

「…私も少し叱る程度のつもりだったのに、本当に困った子だわ」

「あなた…自分の娘に、そんな事」

「…これは私達親子の問題よ、他人が口を挟まないで欲しいわね」

キッと宇佐が日景を睨みつけたが日景の方は意に反さない態度だっ

た。

「ああ…、そういえばお風呂だったわね、私はまだミハシラ様へのお祈りが残ってますので、皆さんで先に楽しんで下さい、日向」

「は…、はい」

日景は最後に優しい笑みを日向に向けた。

「あなたも、ここで祈りするのよ…、いいわね？」

「はい…、お母さん」

日向の答えが満足だったのか日景はニツコリと微笑んだ。

「ちょっと！日向ちゃんは…」

「良いんです…、宇佐さん」

抗議しようとする宇佐を日向が必死に止めた。

「それに…後でお母さんを一人でお風呂に行かせる訳にもいきませんし、私はお母さんと一緒に行きます」

…確かに、今ここで実の母親である日向以外に好き好んで日景と行動を共にしようなんて奴は居ないだろうが。

日向にとってはどんな母親であろうと日景は母親なのだ。

それを俺達が無理矢理日向を引っ張り出し、日景をほって置けと言
える訳が無い。

結局…何も出来ないのか。

「…わかった、じゃあまた後でな」

日向を日景の部屋に戻したまま改めて俺達は大浴場へと向かった。

大浴場はナンバー7とナンバー8の間にあり、ちょうど独房とは反
対側だった。

男と書かれた入口と女と書かれた入口がそこにあった。

「確か…逆の性別の入口に入るのは禁止だったよね」

深見の言葉にそういえばと思い出した。

男が女の脱衣所へ、女が男の脱衣所へはそれぞれ禁止されている。

つーかそれってここに限らず、現世…といったら変だがリアルでも
一緒じゃん。

「…宇佐さん、悪いけど詩織の事頼めるか？」

足の自由がきかない詩織にとって風呂はなかなか鬼門だろうと思っ
たので詩織の事は宇佐に任せる事にした。

女性メンバーの中では一番面倒見が良さそうだし。

「ええ、任せて」

宇佐も快く承諾してくれたが当の本人である詩織は不満げだった。

「彼方のお節介…、お母さんじゃないんだから」

ぶつぶつと文句を言う詩織に俺と宇佐は半笑いて答えた。

…と。

「う、うわあああああああ！！」

「きゃあッ！！！」

その瞬間、男女それぞれの脱衣所から悲鳴が聞こえて来た。

俺と詩織と宇佐は先程のやり取りのおかげで皆より少し脱衣所に入るのが遅かったが。

…先に入って行った誰かに何かあったのか？

「宇佐さん、あんたは女側の方を頼む！あとついでに詩織も！！！」

俺はそう言って宇佐が頷くのを確認し、詩織が「私はいいでなの？」
と言うのを無視して男側の脱衣所に駆け込んだ。

「…ッ！！！」

脱衣所に入った瞬間、俺は立ち止まり、固まってしまう。

まず目に飛び込んで来たのは”赤”

元の色がわからないくらいに深紅に染まった服。

身体中を真っ赤にして床に倒れ込んだ深見 柩の姿だった。

「深見ッ!!」

状況が掴めず、混乱しながらも深見へ呼びかける。

「…遼さん？」

だが俺の予想と反し、深見はいとも簡単にむくりと起き上がってみせやがった。

「…え？ええ!？」

待て待て…。

何がどうなってるんだとチラリと大前田の方を見る。

「僕もよくわかんないんだけど…、いきなりバケツが振って来て、あの液体がドバっとて」

「…一瞬死んだかと思った」

「勝手に殺さないでよ…、でもビックリした」

『うけけけッ！いやぁゴメンゴメン、ビックリさせちゃったかなあ』

深見が身体を縮こましていると例の笑い声と共に天鬼が出現した。

「…お前の仕業か？何の真似だ？」

誹泉が油断の無い警戒の視線を向ける。

『やだなあ、そんな怖い顔しちゃってえ、ほらほら、笑顔笑顔』

「うう…服がベタベタだ」

謎の赤い液体を浴びた深見の服は真っ赤になっている。

「まさか…このままずっと過ごすの？」

…そりゃ本人からしちやたまったもんじゃないだろう。

『うけけけけ…、ご安心を、ここからかこの大浴場のすごい所さ』

だが天鬼はまるで買ったばかりのおもちゃを自慢するようにてくてくと脱衣所に備え付けられたカゴに向かった。

カゴとその隣には脱衣所には似つかわしくない機械仕掛けの箱。

「…何だこりゃ、底が見えねえぞ」

赤松に釣られて覗き込むとなるほど、カゴの底が無い。

そこから見えるのは真っ暗な暗闇だけだった。

『ここに今着ている服を入れてみなよ』

「えっ、服を…脱ぐの？」

『そうだよ、君達にコレの素晴らしい機能を説明しなきゃだしね』

「えっ…と、その」

深見は身体をもじもじとさせて顔を赤くさせた。

…見た目が女にも見えるが、奴は男だ。

よし…再確認OK、大丈夫だ、うん、大丈夫。

「あの…僕」

もじもじもじ…。

…男、だよな？ いや、そもそも女だったらルールでこの更衣室には入れないし。

第一俺にそんな趣味は無いし。

っ…か…それもこれも深見が恥ずかしがってさっさと脱がないのが悪い。

男の脱衣所なんだし、何をそんなに恥ずかしがる事があるか。

「深見、ここには俺達しか居ない、早いとこ話を先に進めよう」

俺としてはさっさと先へ行きたいだけに言った言葉ではあるが。

「遼さん…」

深見には泣きそうな顔をされてしまい、罪悪感が出てきた。

「あの…皆さん、笑わないで下さいね」

それでも納得はしてくれたのか深見は服を脱ぎだし。

「…は？」

俺達が最初に見た物は、常識では有り得ない物だった。

ブラジャーとパンツである。

上下セットなのでパンツは当然女物だ。

その二つを装着しているのは間違いなく深見である。

俺達の誰もがそれに言葉を失い、ただ哑然と見るしか無かった。

これがまた似合ってしまったている。

「う…うう」

そんな状況の中、深見はたまらず泣き出してしまった。

「女装癖の変態かよ…、なるほどねえ、そりゃ自殺もしたくなるわな」

「おい、赤松…」

誹泉が言葉に気を付けろと言うより早く赤松はへいへいと答えるように手を振った。

…確かに、何となくだが深見の自殺の原因がわかったかもしれない。だが、今それを本人に聞くのはあまりにも酷だろう。

「…ひっぐ、うう」

深見は頬を涙で濡らしながらもふらふらとカゴへ向かい。

ヒュンッ

液体まみれになった服をカゴの中へと入れた。

チーーンッ

電子レンジが起動を終了するような音が隣の機械仕掛けの箱から聞こえる。

そのまま機械仕掛けの箱は音も無くパカッと開いた。

「おおっ!!」

中身を手に取った大前田が感嘆な声を出した。

「これは…深見さんの服？それも汚れる前の」

榊さんの言う通り、そこには謎の赤い液体に汚れる前の深見の服があった。

『ねえ、すごいでしょう？これが主婦必見のスペシャルな機能さ』

なるほど、さっき大広間でコイツが言ってたのはコレの事か。

『こちらのカゴに服はもちろん下着等の衣類全般を入れて貰えればそれが”どんなに汚れてても”こちらの箱が新しい物と交換してくれます』

ようするに着替えか。

まあ確かに、風呂から上がった時とかに必要だよな、ずっと同じ服を着続けるのも気分悪いし。

『あとの身体についた液体は大浴場で落としてね、大浴場には”どんなに汚れても”汚れを落とせる石鹸があるから』

「ちなみにコレ、別の服は出ないの？ずっと同じやつ？」

『そうです、このカゴにボッシュートした物がこの箱に出現します』

「なんかアレだね、エロゲーの立ち絵みたいだお」

大前田のそれは読みゲージャンルのNGワードだろ…。

知らない人も多いだろうが基本的に読みゲーのキャラの私服は大体が一種類しかない、立ち絵は変わらないのだ。

基本的にはだいたい制服とかで誤魔化しているが私服は年がら年中同じ物を着てる感じだ。

そこは上手い事脳内で保管するのがベストだ。

例えばテキストでガスマスクをつけてるキャラがいて立ち絵はいつも通りでも俺達はツツコミを入れては駄目なのだ。

とか言いつつも俺って結構ゲームとかにツツコミ入れるの好きなんだよな。

それを有名な大型掲示板のそのゲームのスレに書き込んだりとかさ。

「…ん？」

ちよつと…待て。

大前田のエロゲーの立ち絵と言う言葉が妙に気掛かりだ。

確か…前にそんなのでツツコミを入れたゲームがあったはずだ。

「…あ」

…思い出した俺は短く、一言を呟き。

このカゴと箱の本来の使用法を理解した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1653y/>

リ・ライフ～天獄と14人の自殺者達～

2011年12月25日08時47分発行